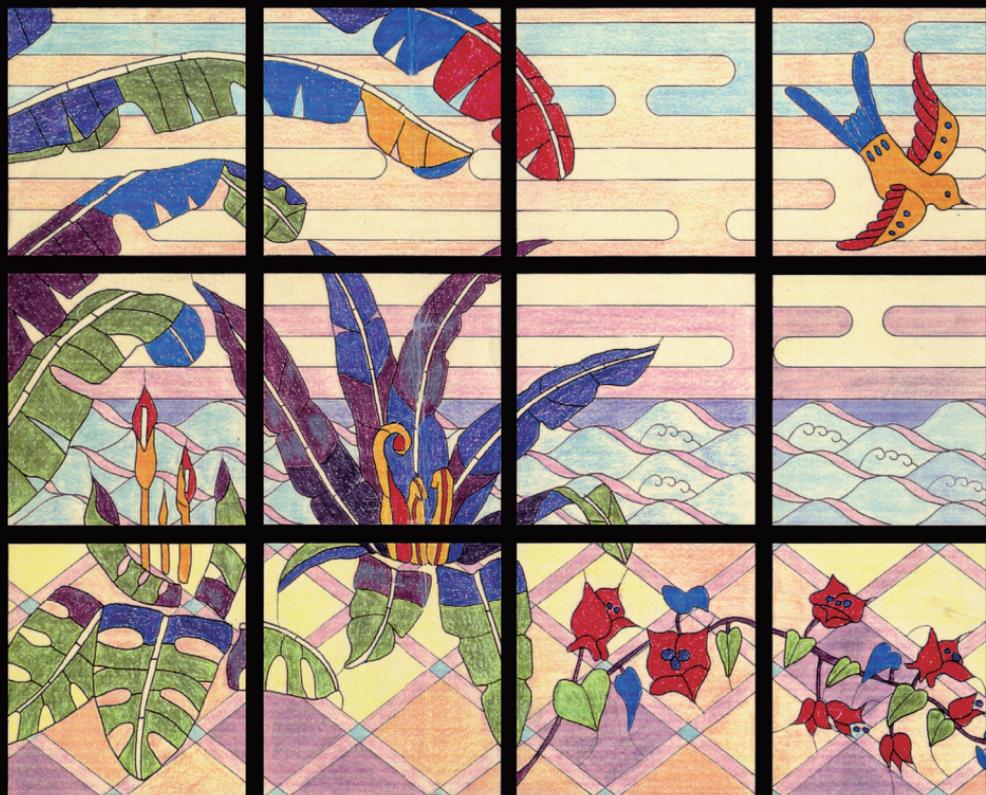


第1回名桜文学賞受賞作品集



第一回 名桜文学賞受賞作品集

第一回名桜文学賞受賞作品集 目次

小説部門

- 最優秀賞 水平線の内側
奨励賞 ビジュルの神様(原題聲)
奨励賞 淡い声

- 榊 惠人 / 1
瑞慶覧涼子 / 28
新垣 未月 / 57

詩部門

- 最優秀賞 違ったもの
奨励賞 心の海色
奨励賞 一九九九
奨励賞 ぼうやのせかい
奨励賞 悲しき炎

- 秋雨 一也 / 81
綾村 湯葉 / 84
葬 ヤマメ / 88
あさとよしや / 91
青木 仁奈 / 94

短歌部門

- 最優秀賞 該当作なし
奨励賞 ひとりでも姦しい
奨励賞 翼をください
奨励賞 *Yellow*
奨励賞 夕焼け空
奨励賞 花火よ、日々よ

- かねしろ葉衣 / 99
元澤 一樹 / 100
安 堂 / 101
新垣 幸恵 / 102
田渕 将也 / 103

エッセイ部門

- 最優秀賞 マンゴーの季節
奨励賞 私は蛹
奨励賞 我が家のイノシシくん

- 大井 輪子 / 105
二 藤 / 111
森山 高史 / 116

俳句部門

最優秀賞	古い嘘	森山	高史
奨励賞	生きてゐる	輝	龍明
奨励賞	花虻よ	本村	隆信
奨励賞	他人行儀な風	金城	隆信
		理子	隆信
		124	123
			122
			121

琉歌部門

最優秀賞	たひら	はやと	125
奨励賞	謝花	建松	126
奨励賞	宮城	真也	127

選評

小嶋 洋輔	小説部門	エッセイ部門	129
玉代勢 章	小説部門		136
あずさゆみ	小説部門		139
吉川 安一	短歌部門		142
おおしろ建	俳句部門		145
屋良健一郎	短歌部門		148
西原 裕美	詩部門		153
小番 達	エッセイ部門		156
波照間永吉	琉歌部門		158
照屋 理	琉歌部門		161

※巻末に募集ポスターを掲載

表紙

『あけの海』

原画 デザイン 帆足デザイン研究所
ステンドグラス製作 沖縄ステンドグラス



小説部門

最優秀賞

水平線の内側

榊 恵人 / 1

奨励賞

ビジュルの神様(原題馨)

瑞慶覧涼子 / 28

淡い声

新垣 未月 / 57



*

*

小説部門

最優秀賞

水平線の内側

榊 恵人

「おい、お前。今月までにアレ決めとけよ」

隣に黙って立っていた上司から突然そう言われて、ぼーっとしていた私は我に返った。身長は私より小さいのに横幅は私の倍はある上司の方を向くと、彼は口をへの字にしたまま前を見つめている。

「え？何をですか？」

「何をつて、お前の契約期限の話さ。来月までだろ」

「ああ…」

そうか。もうそんなに経ったのか。と私は修学旅行生で溢れているビーチに視線を戻しながら思った。視線の先ではオレンジ色のライフジャケットを着た高校生が、キヤーキヤー言いながらバナナボートに乗っている。彼らの他に客はいなかった。閑散期の今、私は上司と二人で突っ立

ている以外にやることがない。天気は快晴で、海は馬鹿みたいに透き通って強烈な日光を反射している。

「えーと、もう少し待ってもらっていいですか」

「いいけど、早くしろよ。社員寮のこととかも色々しないといけんからさ」

上司は語尾を少し上がり気味に伸ばしてそう言った。最初は物珍しかったそのイントネーションも、今や聞き慣れてしまった。そう思ってから、そりゃそうかと思ひ直す。だって私はもう4年ここにいるのだ。

「まあ、来月からまた繁忙期だし、こちらとしてはいてくれると嬉しいけどな」

「…考えときます」

つまり普段は絶対に聞けない上司のこんな言葉を聞くのも、これで3回目ということになる。見え透いた浅ましい上辺だけの言葉に吐き気がした。別に私がいなくなってもすぐに新しい派遣社員が来るだけなのに、よく言うものだ。だけどその言葉に甘えるように、本当は一年で帰る予定だった私はズルズルとここに留まり続けている。その事実には私に小さなため息をつかせた。

全く、私は一体なんだっってここに4年もいるのだろうか。足元の真つ黒な影を見ながらそう思う。最初はほんのバカンスのつもりだったのだ。地元の私立高校を卒業し、やっと見つけた仕事を辞め、特にやることもなかった私はこの沖繩に来了。それは俗に言うリゾバというやつで、仕事場は沖繩北部にあるリゾートホテル付属のマリンレジャー施設だった。仕事内容は難しくなく、家も食事も交通費も会社側が全て負担してくれた。地元から空港まで新幹線で1時間、空港から沖

縄まで飛行機で3時間、空港からここまで車で2時間。生まれ故郷から遠く離れることに不安がなかったわけではないけれど、それよりも何か漠然とした期待の方が大きかった気がする。

沖縄。オキナワ。Okinawa。あの時はなんだかその単語だけでワクワクして、居ても立っても居られないような気持ちになった。

「もうそろそろ終わるな。片付けるか」

「はい」

そんなことを考えていると、いつの間にか修学旅行生のプログラムが終わる時間だった。ジェットに乗りながら大声を出して終了を告げているスタッフと合流して、汗と海水と日焼けと笑顔でぐしゃぐしゃになった高校生たちを砂浜にあげる。私が担当したバナナボートには女子生徒が4人乗っていて、彼女たちは一目散にボートから飛び降りて砂浜を駆け出した。私はそれを横目にバナナボートを海から引き摺りあげる。彼女たちは人目なんてまるで気にせず、屈託のない笑顔で砂浜を駆け回っている。みんなノーメイクで、赤くなった顔と白い脚のコントラストが眩しかった。それは沖縄の日光で4年も焼かれた私の肌とはまるで違う、神聖さと脆弱さが同居した肌だった。

すると私の視線に気づいたのか、その中の一人が私に駆け寄って来た。

「お姉さん、手伝います」

いきなりの言葉に、私は少し狼狽える。

「え、いや、大丈夫だよ」

「でも、それ重そうです」

きつと、恨めしそうにしていた私を見て手伝つて欲しいと勘違いしたのだろう。少女はどこか申し訳なさそうな顔をして私を見つめて、そんなことを言った。150センチほどの身長に華奢な肢体、目の上で切り揃えられた黒髪はセミロングで、猫のように大きな瞳が印象的な少女だった。

「ありがとう。でも私は慣れているから、本当に大丈夫だよ。友達のところに戻って待ってて」
彼女のその目に気圧された私は、嘯まないように気をつけながらそう言った。まさかあなた達がただ羨ましかったから見ていただけとは言えないし、上司のすぐ横で高校生に仕事を手伝わせるわけにもいかない。

それが伝わったわけではないだろうが、少女はそれ以上何も言わず、会釈をして去って行った。高校生にまで気を遣われるなんて、なんて情けないんだろう私は。思わず空を仰ぐと、太陽は西に傾き始めていて、湿った生暖かい空気がカタバイを予感させた。

その夜、予想通り降ったカタバイで湿った道路を眺めながら、私は小さな居酒屋にいた。店内に人はそれほど多くなく、少ない客席は半分ほどしか埋まっていない。店内には沖縄民謡が流れていて、三線の音色が店内の時間を緩やかにしていた。その中で私は窓際の二人がけのテーブルで、揚げ豆腐と海ぶどうを食べながらハイボールを飲んでいる。正面には茶色の髪をアップでまとめた同僚がいて、彼女は先ほどから泡盛を飲んでた。私は泡盛が苦手でも飲めたもので

はないのだが、彼女はいつも平然とした顔でそれを飲んでる。

「今月の給料どんくらいだった？」

私の海ぶどうを勝手につつきながら、彼女はそう聞いてきた。今日は給料日だった。

「14万ちよつと」

「いいな。アタシもうちよつと少なかつた」

「まあ、私は少しだけ多くシフト入つてたし」

正確にいうならば社員や大学生バイトの埋め合わせをしながら私は週6日ほど、朝8時から夕方6時まで働いた。それでも社会保険料やなんやらと引かれて手取りは14万円ほどしか貰えない。社員寮の家賃は格安の2万円だが、他に諸々の支払いをすれば手元に残るお金はごく僅かだ。だがその僅かなお金で、こうして居酒屋に飲みに来るくらいはできる。

「アイツがまたジェットぶつけて壊してさあ。多分今度集められるよ」

「げ、それ本当？」

「本当。今日タイムカード切つた後に発覚してさ、マジでアイツがアタシらより給料高いとか信じられんわ」

話題は大体仕事の愚痴だ。彼女は私と殆ど同期で、4年間一緒に働いてきた仲だった。4年間お互いこうしてなんの生産性もない愚痴に花を咲かせながら、日々を過ごしている。他の仲間たちはいつの間にかみんななくなつてしまった。

「アイツら何してるんだらうね」

「さあ…生きてはいるんじゃない？」

リゾバは大体契約期限が決まっていて、半年か1年ごとに人が入れ替わる。だが今の時代観光地はどこも人手不足なので、本人が希望さえすれば契約期限はいくらでも延長できた。私たちのように何年も派遣社員という枠組みで働くことだってできる。

「アタシらさ、何で沖繩に来たんだっけ」

延々と吐き出せそうだった愚痴も次第に尽きてきた頃、彼女は唐突にそう言った。顔は赤らんで、眼は充血している。

「何、酔っ払ってるの？」

「いや、なんかさ…。もつと、楽しいもんだと思つてただけだなーって…」

「別に、楽しくないわけじゃないじゃん」

私は焦点の定まっていない彼女にそう言った。そう、別に楽しくないわけじゃない。綺麗な海に温暖な気候。内地では味わえない食べ物、お酒、文化。ここでは高卒だからといって馬鹿にされることもない。給料が低いからといって鼻で笑われることもない。私たちは別に不幸じゃない。内地の友人だって、家族だって、みんな私たちを羨ましがる。

「そうなんだけどさ、アタシら、ずっとこのままなのかな」

「ただどその言葉は、私の肩にズッシリとのしかかってくるように重かった。」

「そろそろ帰ろう」

私はそれ以上何も考えたくなくて、机に突っ伏し始めた彼女に向かってそう言った。彼女は半

分目を瞑りながら起き上がる。

「吐きそうだから外で待つとく」

「ちよつと大丈夫？」

「うん。お金後で返すから」

そう言われて、会計を済ませて店を出ると彼女はもういなかった。スマホを見ると「先に帰る」
とだけ連絡が来ている。一瞬無事に帰れるか心配になったが、彼女が住んでいる社員寮はすぐそこなので問題はないだろう。そこまで考えてから私は、そういえば契約期限の話をしなかったな、
と思った。多分、私も彼女も無意識にその話を避けていたのだろう。

周りを見ると先ほどまで湿っていた道路は既に乾いていて、海からは緩い風が絶え間なく吹いていた。だけど雑木林が視界を塞いでいて、海は見えない。見上げると空は雲で覆われていた。
ここはリゾートホテルの近くにある居酒屋で、私の部屋もここから歩いてすぐのところにある。
けれど私は何だか部屋に帰る気になれなくて、家とは真反対の方向に歩き出した。向かう場所は
地元だけが知る小さなビーチだ。ホテルの横にあるビーチの方が近いのだが、そこは夜でも観
光客がいるから嫌だった。私は通り過ぎる人と顔を合わせないように俯きながら、ホテルの金色
のライトが照らす大通りを横切って、白い街灯が点在する小さな道路に入る。人気は全くない。
その人気のなさに縦るように、私は何も考えることなく、ただ道が要求するがままに歩く。背の
高いサトウキビ畑。白っぽいアスファルト。低い赤瓦の屋根。唖れたハイビスカス。朽ちかけた
一对のシーサー。そんな見飽きた光景を過ぎると、程なくして20段ほどの勾配の急な階段が現

れ、視界を塞いだ。軽く息を切らしながらその階段を登ると、そこは既に目的のビーチだ。

目の前にあるのは緩やかに傾斜している小さな砂浜と、ほとんど姿の見えない暗い海だけ。だ
けど眠り歌のような波音が、微かな潮の匂いが、どこか冷たさを含んだぬるい風が、その存在を
確かに保証している。私は砂浜に座り込み、いつまでもいつまでもそれを眺め続けた。

それから一体どれほど時間が経っただろうか。

吹き付ける風で体がすっかり冷えた頃、私は聞こえてくる小さな足音に気づいた。こんな時間
に、しかもこんな場所に誰だろう。私は若干身構えて、そろそろ帰ろうかと立ち上がる。すると
後ろから「ひゃっ」という可愛らしい悲鳴が聞こえた。反射的に振り向くと、そこにいたのは白
Tに緑のジャージを履いた少女である。私はその大きな猫のような瞳に見覚えがあつた。

「君は：確か昼間の修学旅行生だよね」

「え、あっ、えっとバナナポートのお姉さんだ」

少女は昼間私に声をかけてきた修学旅行生の子だった。彼女は大きな目を更に見開いて、私の
登場に驚いているようだ。

「そうそう。こんばんは」

「あ、こんばんは」

「こんなところでどうしたの？お友達は？」

だが彼女以上に私も驚いていた。なにせ夜は地元民すら滅多にこない暗くて小さいビーチに、
修学旅行生の女子がいるのである。

「えっと、一人でお散歩です。寝れなくて」

「そっか」

こんな夜中に散歩するのは校則違反なのではないかと思つたが、別に修学旅行生の校則違反を咎めるのは私の仕事ではない。

「にしてもよくここがわかつたね。ここ地元民しか知らないのに」

「ホテルの人が話してるのを聞いたんです」

「そうなんだ」

「お姉さんは」

「ん？」

「お姉さんはここで何をしていたんですか？」

少女はたどたどしくそう聞いてきた。私はその問いになんとか責められているような気持ちになつて、もう一度砂浜に座り直す。目の前にはただの闇。だが暗闇に目が慣れた今の私には、空の闇よりも濃い海の黒色が見えている。

「…水平線」

「え？」

「ここ、座つたら？」

私の言葉に訝しげな顔をした少女に、隣に座るように促す。少女は少し逡巡した後、おとなしく隣に座つた。体育座りのその身体から、ほのかな体温が伝わってくる。

「水平線を、見てた」

「…どうしてですか？」

「さあどうしてだろうね」

別にこれといった理由があるわけではない。なんとなく水平線が好きなのだ。果てのない空と海。その果てと果ての間。そこに存在している水平線が私は好きなのだ。夜の海でも昼の海でもどちらでもいい。ただどこまで行っても存在するその確かさと、どこまで行っても辿り着かないその不確かさに、どうしようもなく惹かれる。

「何かあったんですか？」

「さあね…」

さて、何があったのだろうか。私に一体何があったのだろうか。考えてみるけれど、頭がごちゃごちゃして考えがまとまらなかった。きつと酔っぱらっているのだろうか。

「お姉さんは、沖繩の人ですか？」

黙ったままの私に少女はそう聞いてきた。私は行き詰まった思考から逃げ出すように、その質問に答える。

「ううん。私はナイチャーだよ。4年前に沖繩に来たの」

「ナイチャー？」

「ナイチャーは内地の人って意味」

「そうなんだ。すごい」

本気で感心しているようなその声に、私は少し笑ってしまう。

「すごいって、何が？」

「ナイチャーの意味と、沖繩に来たってことです」

「別にすごいくないよ」

本当に、すごいくない。私はただ馬鹿みたいに何かを期待してここまで来てしまったただけだ。すごいことなど一つもしていない。

「あの、あの沖繩の人って本当になんくるないさーとか言うんですか？」

「え、どうだろう。あんまり素で使ってる人って見たことないけど……」

「なんくるないって、『やるべきことをやってればなんとかなる』って意味なんですよ。バスガイドさんが言っていました」

「ああ、そうらしいね。こっち来たばかりのとき、誰かにそんなこと言われたなあ」

だが少女は私のことを何かすごい人のように勘違いしたみたいで、矢つぎ早に質問をしてくる。

「沖繩って雪降るんですか？」

「いやあ降らないよ。10度以下になることがまずないもん」

「じゃあ花粉がないって本当ですか？」

「本当だよ。私こっちは花粉症になってない」

「えーいいなあ！私花粉で肌荒れるから」

「あーそれは辛いね。沖繩は湿度高いから、乾燥肌とかとも無縁だよ」

その質問はどれも可愛らしく、他愛のないものばかりだった。でも私はその質問に一つ答えるたびに、何故か頭の後ろが重いような気分になった。風はいつの間にか止んでいて、蒸し暑くもないちょうどいい空気が私を包んでいる。空もいつの間にか晴れてきていて、雲間からは星空が覗いている。なのに私の気分だけが、重く沈み始めていた。

そして少女の好奇心が一通り落ち着いた頃、彼女は言った。

「いいな、私も沖繩に住みたいな」

その一言は話の流れ的におかしなものでもなんでもないし、観光客の誰もが冗談半分に言うことだった。だけどその一言に、私は固まってしまった。それは羨ましがっているというよりは深刻そうな少女の表情と声に、ではない。その一言に対して冗談でも「いいね」とか「住んじやいなよ」と即答できない自分に、だ。

「でもそんなの無理ですよ」

少女は笑いながらそう言った。その顔は昼間の日焼けのせいかほんのりと赤く、どこか疲れているようにも見えた。

「ごめんなさい。変なこと言って」

その顔になんて返事をしたらいいのか迷っていると、彼女は「じゃあ、おやすみなさい」と言って走り去ってしまった。

「あっちゃと」

少女の姿は白熱灯の光を超えて、あつという間に暗闇の中に消える。もう遅いからホテルまで

送るつもりだったのに、女子高生の脚力には敵わない。私は彼女が消えた暗闇を見つめながら、もう彼女には会うことはないのだろうかと思つた。けれど、彼女の高校はあと2日ほどうちのホテルに滞在する予定だ。ならまた会う機会もあるだろう。だからどうというわけじゃないけれど、なんとなく、そう思つた。

翌日は晴れで、私は喧しい蝉の声で目が覚めた。枕元の時計を見ると時刻は9時を指している。今日は休みなのでいつもならあと2時間は寝るところだ。だがカーテンの隙間から見える空は何だか勿体無いくらいにいい天気で、私はまだ名残惜しいベッドから無理やり起床した。そして顔を洗いながらふと、昨日の少女は無事にホテルに帰れたのだろうかと心配になつた。結局昨日は家に帰ってシャワーを浴びるなり倒れるように眠つてしまい、少女のことは今ですっかり忘れていたのだ。私は濡れた顔のまま急いでスマホを確認する。だが心配とは裏腹にそこに上司からの連絡はなく、代わりに同僚から謝罪の連絡があるのみだつた。

まあこの北部の田舎で事件などそうそう起きない。そう思い、私は少女が無事であろうことに安堵しながらも、契約期限のことを思い出してまた複雑な気分になつた。今日はなんの予定も入つておらず、このまま家に居れば余計なことを考えて気が滅入つてしまいそうである。私はスマホを放り投げると急いで支度をして、逃げるように家を飛び出した。既に外気温は30度を超えていて、茹だるような熱気が私を包む。昨日と違って今日は風も吹いていない。私はできるだけ日陰を選んで歩きながら大通りを進んだ。仕事場のホテルを通り過ぎ、軽い坂を登ると大きな水族

館がある。私はその年パスを所持していて、暇なときは巨大な水槽の前で涼むことにしていた。暑さに顔を顰めながらふと目を向けると、大通りにはソーキそばと大きく書かれた看板や、シーサー手作り体験と書かれた看板が目につく。そのほかにも藍染体験やら島ぞうり手作り体験やらタコライスやらの店がたくさんあって、少ない観光客で賑わっていた。ここに来たばかりの時はそのどれもが珍しく、楽しかった。だけどいつしかこの街にはそれ以外何もなことに私は気づいた。ここにはショッピングモールも、服屋も、本屋も、映画館も、食べ飽きたチェーン店もない。あるのはただ観光客のためにカテゴライズされた店だけ。私はそれを見ると、いつも何かに置いて行かれたような感じがする。

そんなことを考えていると、あつという間に水族館に着いた。家から計15分ほどの道のりだったが、着いた時には既に汗だくである。でも開館したばかりの水族館は人影もまばらで、私は観光客に邪魔されることもなくスムーズに入館することができた。よく冷房の効いた薄暗い館内と、青い水槽はいかにも涼しげだ。陽光の差す水槽には溢れるほどの魚がいて、カラフルな魚たちを横目で眺めながら、私はゆっくりと歩を進める。

小さな突起が頭についた魚。黄色と青の蛍光色の魚。やたらと頭の大きい魚。何度聞いても覚えられない名前のそれらには全て沖縄名がついている。ミーバイ。チヌマン。アバサー。オジサン。制服を着た集団がそれを呟いて笑っている。私はその後ろを小さくなって通りすぎる。

夥しい数の熱帯魚。刺々しい海藻。青くてほとんど何も見えない水槽。それらを過ぎると壁に小さな水槽が沢山並んでいる。明るい水槽の隅には金色のフグ。緑色の水槽にはタツノオトシゴ。

暗い壁の水槽にはガラスに張り付いたヒトデ。なぜこんなにも水槽を分けるのだろうか。同じ水槽では生きていけないのか、それともただ見やすいようにしているだけなのか。いつも疑問に思うけれど未だその答えは知らない。

そんなことを考えながら順路を曲がると、水槽の梁の間から黒い大きな影が見えた。水槽は巨大だが太い梁の間からその全貌は見えない。だが私の体よりはるかに大きい存在がすぐ横にいることだけはわかった。私はその影と並行するようにゆつくりと歩く。続く順路を横切ると、そこはまるで映画館だ。階段になった通路にはシートが並べられていて、その前には縦8メートル、横20メートルのスクリーンがある。もちろん、それはスクリーンではない。それは映画のスクリーンと見紛うほどの巨大な水槽なのである。見物客はみんなその巨大な水槽の前に立ち、そこにいる巨大な生物を見上げていた。斑点模様のそれは水槽の横幅の半分くらいの大きさで、巨大な尾びれを左右に振り回しながらゆつくりと回遊している。沖繩に来るものなら誰でも知っているだろうそれは、言わずと知れたジンベエザメだ。ジンベエザメは2匹いて、まるで私たちを見下ろすように高いところを回遊し続けている。

私はそれを横目で見ながら、ジンベエザメと同じ位置になるように一番上のシートの真ん中に座った。俯瞰で見ると、ジンベエザメの大きさがよくわかる。彼らにはこの巨大な水槽でさえ狭いだろう。見物客はジンベエザメが近くを横切るたびに「おー」という歓声をあげる。観光客はみんなこれを見るためにやってくる。ジンベエザメがいなければわざわざ何も無い沖繩の北部になど来ない。私たちは全てジンベエザメの付属品のようなものだ。

「あれ？」

ほんやりとジンベエザメとそこに群がる人影を眺めていると、見覚えのある背格好をした人物を見かけた。それは昨日の少女だった。彼女はいま高校の制服を着ていて、同じ制服を着た集団と戯れている。今日は自由行動か何かなのだろうか。

「楽しそうだなあ」

ジンベエザメを背景にきゃつきゃつと写真を撮っている彼女たちを見てみると、思わずそんな言葉が漏れてしまう。月並みな言葉だけど、あそこにあるのは私が失ってしまった時間だ。綺麗で純粹で無垢でイノセントな時間。もし私があ頃に戻れるならどうするだろう。一瞬、あの少女に自分が重なる。

もつと必死で勉強すればよかつただろうか。ちゃんと大学に入ればよかつただろうか。そうすれば今頃、私はもつと違う気持ちでこの水槽を眺めることができたのだろうか。そこまで考えて、私はその想像を急いで振り払った。何故ならそんなことを考えても意味はない。私はあ頃には戻れないし、戻ったところで私に何ができるといふのだ。

「お姉さん」

ほんやりとそんなことを考えていると、いつの間にか隣に制服を着た少女が立っていた。私はびっくりして思わず声をあげそうになる。

「すいません。驚かせて」

「う、ううん。こんにちは。また会ったね」

「はい。昨日はすいませんでした」

「いや、何もなかったようで良かった」

少女は私の言葉に微笑んで、「隣、いいですか？」と聞いてきた。

「え、うんいいけど…。お友達はいいの？」

「いいんです。私がいなくなっても同じだから」

彼女はそう言いながら、水槽の前にいる少女たちを振り返る。その大きな瞳はやはりどこか疲れているようで、どこかここではない遠くを見つめているようでもあった。

「そんなことないですよ。さつきも楽しそうに見えたよ」

「いいえ、違うんです」

少女は私の隣に座った。

「お姉さんは代理遍在の法則って知ってますか？」

「え？いや、知らないけど…」

急な質問に私はまたびっくりする。

「簡単に言うと、代わりはどこにでもいるって意味です。必要とされているように見えても、その人がいないとダメなように見えても、代わりはいるんです」

そこで少女は言葉を区切った。巨大な水槽の中でジンベエザメは変わらず回遊し続けている。制服を着た集団はいつの間にかどこかへ行ってしまった。

「私だってそうです。特別な人間なんていないんです。私はいなくてもいいんです」

「そんなこと……」

「ない、と私は言えなかった。何故ならここは沖縄で、私はリゾバの派遣社員だった。」

「何かあったの？」

「代わりに出たのは一見少女を気遣うような、上辺だけの言葉だった。」

「私には何もないんです。趣味も特技も、キラキラするような夢も目標も」

視線の先では観光客が入替わり立ち替わりやってきては、ジンベエザメを見上げて行く。水槽の底には1メートルか2メートルほどの名前のわからないサメが沢山いるが、彼らは何故か身じろぎすることなく水底でじっと佇んでいて、観光客の目に止まることはない。

私の隣では少女が喋り続けている。

「別にそれで不幸なわけではないんです。毎日朝起きて、電車に乗って学校に行って、勉強して、良い点を取ると褒められて、悪い点を取ると怒られて、たまに友達と遊びに行って……。きっと私は恵まれています」

ふと、どうしてあのサメ達は泳いでいる小魚を食べないんだろうかと疑問に思った。そういう種類なんだろうか。それとも餌を与えられているからわざわざ取って食べようとしなくていいだけか。

「でも私はそれで精一杯なんです。特別になんて絶対になれないのに、これから先もずっとこれが続いて、その中にはもつと辛いことがあるのだと思うと……私、耐えられない」

あそこで泳いでいるジンベエザメとサメになんの違いがあるのだろうか。水底で這いつくばっている名前もわからないサメと、高いところを延々と回遊し続けるジンベエザメ。同じ水槽にいな

ければあのサメはもつと注目されていただろうに。貰える餌は同じなのだろうか。それとも違うのだろうか。私にはわからない。

「だから沖繩に住んでいるお姉さんが羨ましいです」

水槽の外では観光客がジンベエザメを見上げている。少女が泣きそうな顔でジンベエザメを見ている。サメが水底で蹲っている。あの底から見上げる水槽はどんななのだろうか。綺麗なのだろうか。汚いのだろうか。

「暖かくて、キラキラしてて、自由に、楽しくて……。私、沖繩に住みたいです」

そこでふと、昨日の水平線が頭に浮かんで、自分はあの水底のサメと同じなのではないかと思っ
た。

その刹那、「ふざけないでよ」という言葉が口をついて出た。

一瞬、その声が自分から出たものだと思わなかった。それくらい低くて冷たい声が唐突に口から出た。これは本当に自分の声なのかと思いつながら、私の口は続ける。

「あなたは何もわかっていない。今の環境がどれだけ大切なのかわかっていない。私が羨ましい？週6日働いて手取り14万円でここに閉じ込められている私が羨ましい？馬鹿言わないですよ。ここにあるのはあなたが望んでいるような暖かくてキラキラしてる自由な毎日なんかじゃない。あなたは、」

どうしちゃったんだろう、私。少女の大きな瞳に反射して、顔を醜く歪ませている自分が見えた。眉毛が薄く目も小さいその顔が、どうしようもなく憎らしかった。

「あなたは、どれだけ精一杯でも毎日学校に行つて、ちゃんと勉強して、いい大学に入つて、就職して、結婚して、子供を作つて、真面目に生きるの」

何故だか急に視界が滲んで見えなくなる。

週休2日。手取り14万円。家賃2万円。光熱費1万円。スマホ代1万円。年金代保険代コンタクト代諸々4万円。食費娯楽費3万円。勤務日のみ朝食食事付き。昇給なし。社員登用あり。ボーナスなし。長期休暇なし。有休あり。残業あり。仕事内容：接客サービス。私にあるのはただその現実だけ。

「そうしないとダメなの。それが、」

私はそこで口を噤んだ。それを言つてしまつたら自分の全てを否定することになる気がした。でも私の口は勝手に話し続ける。

「それが、幸せなの」

私の言葉に、少女は答えなかつた。そのまま無言で私の隣を去つていく。私はその後ろ姿を見ることができない。私は下を向いたまま動くことができない。

今度は、また会うかもしれないとは思わなかつた。

その夜、私はまた居酒屋にいた。水族館から帰つた後、私は何だか無性にアルコールが欲しい気分になり、同僚を誘つて居酒屋に来たのだ。昨日あんなに酔つていたのにも拘わらず、彼女は快くOKしてくれた。いつも人が少ない店内は珍しく活気付いていて、子供のはしゃぎ声が響き

渡っている。私たちはまた窓側の席で、ハイボールと泡盛を飲んでいた。

「なんかあったの？珍しいじゃん、2日連続でなんて」

「いや、ちよつと飲みたい気分になっただけ」

「そっか」

私のはぐらかした返事に、彼女は素直に頷く。さすがに4年も一緒に仕事してきただけはある。私たちは特に会話をすることもなく、黙って枝豆を食べながらお酒を呑んだ。でもお酒を飲んだところで、気分はあまり晴れなかった。

そうして3杯目を注文した頃、一人の若い男が私たちの席に近づいてきた。

「お姉さんたち、基地問題についてどう思いますか？」

男は低い身長に彫りの深い顔を乗せて、歯並びの悪い口でそう話しかけてきた。この手の輩はよくいるが、居酒屋で話しかけられたのは初めてだった。

「特に何も思いません」

「え？何もですか？」

私が追い払うようにそう答えると、男は身を乗り出してそう聞いてきた。同僚はスマホを弄りながら男を無視している。男の口は酒臭くて、私は身を引きながら嘲るように返事をした。

「はい。困ってないので」

「あなたが困ってなければいいんですか？困っている人もいますよ？」

じゃあお前は困っているのか。本当に困っているのか。私がそれを案じているフリでもすれば

満足か。被害者ヅラしたその汚い顔にそう聞きたくなるが、ぐつと我慢する。

「それは可哀想ですけど、それ以上の感情はないです」

「はあ、そうですか」

そこで男は何かに気づいたかのように私たちを見た。

「あ、あんたらナイチャーか。そうだろ？」

「そうですが、何か？」

「道理で冷たいわけだわ。とつとと内地に帰んな」

男は吐き捨てるようにそう言うと、自分の席に戻っていった。その席には小さい子供が2人と、けばけばしい若い女がいた。

「アタシたちって、ウチナーンチュなのかな、ナイチャーなのかな」

スマホを見ていた同僚はいつの間にか顔をあげていて、独り言のようにそう聞いてきた。私の視線の先では色の濃い子供たちが嬌声をあげてはしゃいでいる。彼らはまるで自分たちがこの世で一番偉いかのように大声で喚んでいる。私は彼女の問いに対する答えを持っていない。だが4年ここにいるのも、私たちは余所者だった。

「ハイボールと泡盛です」

3杯目の酒が運ばれてきた。泡盛の独特な甘い匂いが不快だった。

「アタシさ、来月いっぱい辞めることにしたわ」

「…え？」

私が泡盛の匂いに顔を顰めていると、彼女は唐突にそう言った。私は話について行けず一瞬反応が遅れてしまう。少しの間、2人の間に沈黙がこだまする。店内には以前と違って沖縄民謡は流れておらず、代わりに地元のラジオが流れていた。無理に方言を組み込んだそれはわざと沖縄感を出そうとしているのがバレバレで、聞いてて痛々しかった。

「何、急にどうしたの」

「いや急じゃないでしょ、来月で契約期限切れるし」

契約期限という言葉で、私は現実に取り戻されたような気がした。頭の後ろが回っている感覚に目眩がする。仕事を辞めること自体はおかしなことでもなんでもない。でもどこかで、どこかで彼女だけは私と同じだと思っていた。

「辞めてどうするの？次の職の当てでもあるの？」

思わず責めるようにそう聞いていた私に、彼女は何でもないかのように答える。

「んー仕事はまだ探していない。それよりもワーホリに行ってみようと思つててさ」

「ワーホリ？」

「そう、オーストラリア」

「オーストラリアで、何かしたいことでもあるの？」

「んーてか、とにかくここを出たい、かな」

私はその言葉に吐き出しそうになった溜息を無理矢理ハイボールで流し込んだ。それはこれまでに何度も何度も聞いた話だった。ここに来た奴らはみんなこうして無謀な夢を掲げながら沖縄

を出て行く。ワーホリ、インターネットビジネス、起業、留学、ユーチューバー、インスタグラム、タレント、漫画家、小説家、エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ。辞めていった彼らが今どこで何をしているのか、私は全く知らない。

「あとほら、英語話せるようになったら色々有利じゃん」

ねえ、じゃあ教えてよ。ここを出てどうするの？有利って何に對して有利なの？就職？海外旅行？それともただカッコつけただけ？私たち高卒じゃん。大学に行くような頭も金もないくせに、仕事も碌にできないただの派遣社員じゃん。そんな奴らが今更大金はたいてオーストラリアなんか行って、仮に英語が喋れるようになったから何なのよ。それで私たちの馬鹿丸出しの学歴が変わるの？いきなり東京の超一流企業に就職してお金持ちになれるの？その夢は、今の生活を捨てるほど大事なもののなの？

「アンタはどうするの？仕事、続けるの？」

二の句を継がないでいる私に、彼女は言った。

「アンタはさ、何がしたいの？」

私はまた何も答えることができずに、ただハイボールを飲み干す。喉を通ったハイボールは熱かった。漂ってくる泡盛の甘い匂いに、吐き気を催した。私は酔っ払ったふりをして、トイレに逃げる。無理矢理えづいて胃の中のものをつき出そうとしたけれど、何も出てこない。私は何だか泣きそうになってしまつて、トイレから戻るなり心配している同僚にお金を渡して店を出た。外に出ると湿った生暖かい風が吹き付けてきたので、深呼吸をする。海の匂いを含んだ風が肺を

村で、私は海で遊んだり山で遊んだりする以外にやることがなかった。退屈な私はだからよく祖母と一緒に海岸を散策して、そこに落ちている色々なものを集めた。それは外国語が書かれた瓶の蓋だったり、泥だらけのタペストリーだったり、何十年も前の記念メダルだったりした。今ならそれがただのガラクタだとわかるけど、当時の私にはそれがとんでもないお宝に見えた。

「ねえ、このお宝はどこから来るの？」

ある日いつものようにガラクタを拾っていた私は一緒に歩いてきた祖母にそう聞いた。その顔はもうあまり思い出せないけれど、祖母ははるか彼方に広がる海を指差してこう言ったのだ。

「あの水平線の向こう側から来るのよ」

思い出した。あの時から私はあの水平線の向こう側を夢見ていた。見たことも聞いたこともないワクワクした何かがそこにあるような気がしていた。今の退屈な現状を打破してくれるような何かがそこにあるような気がしたのだ。

『アンタはさ、何がしたいの？』

私は何がしたかったのだろう。辿り着いたここにあったのは、何も変わらないただの疲弊した現実だった。地元から空港まで新幹線で1時間、空港から沖縄まで飛行機で3時間、空港からここまで車で2時間。温暖な気候、綺麗な海、珍しい食べ物、異なる文化。それらは閉塞した現状の中で腐り果てた。ここは沖縄。かつて夢見た水平線の内側。

私は砂浜に膝をついて俯いたまま、一人泣き続けた。

半年後、女子高校生が飛び降り自殺をしたというニュースが全国ネットで流れた。それはあの修学旅行生の女子がいた高校だった。自殺をしたのがあの少女なのか確証はない。

同僚はいつもの居酒屋で送別会をした後、オーストラリアに行く準備期間だと言って実家に帰っていった。だが数ヶ月が経った今でもオーストラリアには行っていない。頻繁に取り合っていた連絡も最近は少なくなった。

私は上司の勧めで派遣社員から契約社員へと昇級した。少しだけ給料が上がった。仕事内容が増えた。だが固定給になり残業代は出ず、社員寮からも追い出された。使えるお金は更に少なくなつた。

水平線はもう見えない。

小説部門

奨励賞

ビジュルの神様(原題 馨)

瑞慶覧涼子

何日も、雨が降ったり止んだりしていた。

灰色の大小の雲を浮かべ、空は淀んでいる、背後には白い雲や青空がとぎれとぎれに見え、そのままだら模様の雲の切れ間から射し込んだ陽が街をたよりなく照らしていた。

入り組んだ路地に、低い木の生垣に囲まれた瓦ぶきの家やブロック建ての家々が軒を連ねている。ミカンやバンジローヤ、名前を知らない木々に混じって南洋杉とか、ブーゲンビレアとか、サルスベリとか、クロトンなどの木々が、塀をはみ出し、屋根の上まで枝を伸ばし、灰色の屋根やねを彩っていた。

ムクゲが門前に花を落とし、雨水を吸い込んだまま薄紫の色を積み重ねている。

路地の道々を通り抜けていく風が、重く湿つぽい。花や木や土や水の匂いを含み、溶け込んだ空気が後を追う。

空を見上げる。晴れるのかと思うと、広大な空がたちまち暗くなり、雨になった。

空は梅雨を孕んでいる。じめじめして肌にもとつく空気が、うつつうしさを強める不快な日は長く続いていた。

五月の今日の空は久しぶりに晴れわたっていた。

校舎は陽に照らされて、光に満ちあふれていた。陽だまりの中、たつぷりと水を吸い込んだ花壇には、金せん花や天人菊や金魚草などがつぼみをいっぱいたくわえて咲き始めている。紫陽花は枝葉を茂らせて大きなかたまりになり、水色の大ぶりの花を咲かせ、いくつものつぼみを抱いていた。

薫は中学二年生。昼休み。教室の窓辺の席から外を見ている。教室にいるのはほとんどが女子で、何人かで固まっておしゃべりをしていたり、予習をしていたり、寝ていたり、本を読んだり思い思いに過ごしている。

空は青く澄みきって、白い雲さえも浮かんでいない。真っ青な空をじっと見ていると、鼻の奥が涙腺とつながる。青に染まって、そのまま湾の中に溶け込んでしまいたいそうになる。

薫の通う中学校は基地の街にあり、広大な湾を望む高台にあった。通学路は、街の中心地の一角から、基地と並行して校門近くまで四五百メートル続いていた。

基地はフェンスに囲まれ、芝生の平地に何棟かの建物がゆつたりと建っている。道沿いにテニスコートがあり、白のTシャツと白の短パン姿で兵士たちがテニスをしていた。登校時、出勤の

あわただしい時刻、のんびりと楽し気にテニスをしている。薫の生きている世界と、果てなく、遠く、隔たりのある、無縁の世界が展開していた。

学校に隣接して、一段と高くなった所に鉄塔が建っていた。岩が突出してその分さらに高くなった所に建っている。見上げる鉄塔は巨大で、とてつもなく高かった。

鉄塔は、夜になると、頂点あたりに赤い灯を点滅させていた。その赤い灯は遠く離れた町村からも見える。雨の日も、夜空で点滅する赤い灯に、薫は言いようのない物悲しさを感じていた。何のために、毎日赤い灯が点滅しているのか分からなかった。

通学路をそのまま東方に進むと、長い下り坂で、道は舗装されていない。両側はススキや茅が伸び放題で、建物はなく、所々に墓があつた。曲がりくねった坂道は途中から急こう配になり、平地にたどりつく。そして、横広がりの家並みを抜け、塩水に浸かった荒くて棘っぽい草の生えた湿地帯を抜けると、藍、群青、青、薄水色が時とともに変化する濃淡に彩られた湾に行き着く。

湾は、晴れの日はもちろんの事、雨の日は雨の日なりに、曇りの日は曇りの日なりに、風の日には風の日なりの美しさがあり、時おり、圧倒される雄大さを見せていた。

登校時、校舎は朝陽に照らされ、帰校時、校舎は夕日に染まる。

薫は今朝の夢を思い出していた。全身、泥色をしたおばあさんの夢だった。髪も顔も着物も泥にまみれ、それがそのまま乾いたような状態だ。着物は粗末な一重一枚で肌に密着し、痩せた体の骨を太く浮き上がらせていた。

長い髪が泥のかたまりのように肩の上に丸まっていた。しかも、その背はまっすぐで普通のおばあさんの一倍半の高さをしていた。しわに覆われた目で薫を見ている。その目は慈愛に満ちていた。涙ぐんだ目で薫を見つめ、何かを訴えていた。

夢からさめた時、姿は見えないが、その場にいる気配がした。両耳がジージーと大きく鳴っていた。ジージーという音は頭から聞こえるような感じもした。

あたり一面くちなしの香りが漂っていた。そのおばあさんに心当たりはなかった。怖い、この思いもなかった。くちなしの香りに満たされた部屋で、やがて、ジージーと鳴る音は部屋中に鳴りひびいた。

中学二年になって、そのおばあさんの夢を何度も見ていた。一度目よりも二度目、二度目よりも三度目と現れ方が過激になっていった。ふだん見る夢とはあきらかに違っていた。リアルであった。何かが自分の身におこるかも知れないと、ぼんやりした不安にとらわれていた。しかし、事故にあうとか、怪我をしたりするような事ではないだろう。登校した後も、薫は夢のおも苦しさをずっと引きずっていた。

中庭では、同じクラスの男子たちがボールを取り合って遊んでいる。その中に、薫と同じ名前
の岸本馨がいた。ボールをつかみ、走り、飛び上がってリンクにいれる。その姿はまるで、宙を舞う白い鳥のようだ。

新学期になって、薫は、クラスに自分と同じ名前の男子がいることに衝撃を受けていた。から

かわれることは目に見えている。

目立つこともなく、明るくもなく、自分を主張することもなく、まわりに同調して、何気なく過ごしている薫の日々が打ち砕かれる思いだった。波立たず日々が過ぎていつてほしかった。

馨を初めて見たとき、薫は天と地を感じた。今まで可もなく、どちらかと言えば不可の多い日々を過ごしてきた自分が公共の面前に引きずり出された感じだった。ほんやりして、周りに気を使つて、事を起こさないように生きている自分のような人と、同じ名前のためにからかわれて、薫は心底、岸本馨に申しわけない気持ちだった。名前の漢字が違うことがせめてもの救いであつた。

岸本馨はからかわれることに対して平然と受け流していた。カオルーとか、カオルさんとか、わざとらしく呼ばれるからかいの言葉に、立ち位置を乱すことなく、軽く笑つて相手にしなかつた。薫を見る目も、外のクラスメートを見る目と同じだった。嫌な人を見る目ではなかつた。薫はその目を見て安どした。

馨が平然としていることからかはいは、あつ気なく、いつときで止んだ。馨と薫ではからかいがいがないのだ。

岸本馨と口をきいた事はない。もちろん、これからもないだろう

心強いのは親友の由紀子と、一年に続き二年生になつても同じクラスになつたことだ。家が近所のせいもあり、登下校はほとんど一緒になる。

薫の住んでいる地域からの学校への道は、華やかな大通りから、少し道をそれる。大通りから少ししか離れてないのに、そこはもう街はずれのような光景になっている。舗装されていない石こ

ろ道。小さいくぼみのいっぱいある道。雨の日などは靴が水びたしになり汚れる。

通学路の一方は家並みが軒を連ね、反対側は段差のある丘のような横広がりの野になっていた。丘の上に三メートルほどの青々とした松の一群があつた。青々とした松は、空と野の間の緑の帯のように、横並びに長く続いている。松の木々に隠れて見えない丘の向こう側に行ったことはなく、家々があるのか、そのまま野が続いているのかわからない。

野は灌木と畑と荒地が混在し、あちこちの畑には小さなチョウが群れ飛んでいた。

この通学路は正門の反対側の裏門に続いている。

「あの家ね・・・」

学校近くまで来たとき、左側への道があり、曲がって二件目の家を指して由紀子は言った。

「岸本馨の家だよ」

ブロック塀の木々に囲まれた二階建ての家だつた。門はブーゲンビレアがアーチをつくり、四方八方に花枝を伸ばしながら両側に流れ、ブロック塀を彩っていた。いかにも、馨にふさわしい家だと思つた。

学業優秀な人たちに対して、薫は何のうらやましさも感じなかつた。あこがれもなかつた。いつも勉強からかけ離れたところにおいて、得意な事もなく、将来の夢など考えたこともなかつた。評価は図工と国語を除けば(3)のまま、無為に流されていく中学生を送っていた。ぼんやりして、それを苦にも思わなかつた。

もの心ついたときから、薫は学校から帰るとほとんど外に遊びにも行かず、細切れの布で小物

を作ったり、人形を作ったり、貝殻をくるんでかざりものを作ったりしていた。

間借りしている入り組んだ路地の一郭の六畳一間の部屋で、母が仕事から帰る夕方まで、針と布を持って作りたい物を作りたいように作っていた。異様に足の長い人形を作った。毛糸で背中までの長い髪をつくり、ギャザーたっぷりの長いスカートをはかせた。かすり地の着物を縫い赤い帯を締めた。足を長く作りすぎたため、帯の位置がしっくりいかずこっけいな感じがした。作り物に夢になると時間を忘れて寂しさも感じなかった。

又、貸本屋から本を借りてきて少女小説を夢中で読んだ。少女小説の空想の世界で薫は変身した。主人公には決してならず、金持ちの女の子や、継母にいじめられている主人公の少女の友達になり、少女を守り助ける勇敢な女の子になった。

月に一冊だけ買ってもらえる本を何度も何度もくり返し読んだ。物語に入り込み、主人公といつしよに喜んだり悲しんだりした。そして、脚光を浴びる人の影に追いやられる人の、悲しみや悔しさや苦しみを共有した。

少女小説の表紙や挿絵を描いている藤田ミラノの夢のような世界に迷い込んだ。

はじめて奇妙な夢を見たのは八歳のころだった。

目を覚ますと目の前の闇に、あざやかな、きらびやかな無数の線、ガラスを極細にしたような二十センチぐらいの線が、縦に斜めに降っていた。その一本一本は単色で七色ある。並べると虹色になるだろう。夢ではない。闇の中で薫は大きく目を見開き何だろうと手を伸ばす。つかもう

としても手は空を切り、手ごたえがない。降り続ける光の線は下の方で、吸い込まれるように消える。目をつむっても開けても同じように見える。目の前に見えるのに取れない、つかめない。十数秒たつと消えて、何ごともなかったような闇の部屋に戻っている。

何だっただろう。恐怖を感じるような夢ならば誰かに話したかも知れないが、成長する過程で誰にでもある普通の事として考え、誰かに話すことはなかった。

中学二年になると明け方見る夢に、色が付いていた。夏の海の浅瀬のエメラルドグリーンの色をした雲のようなものが天井いっぱい、又、目の前で、モヤモヤだったりモクモクだったり動いていた。

天井が海になり波が勢いよく次々と打ち寄せてくる。緑と黄緑と薄いオレンジ色が混ざった色がついていて、映画の画面を見ているような、実際の海を見ているような、波の音も聞こえるような、普通ではない夢を見せられていた。夢からさめると、ジージーと電子音が頭全体から鳴っていた。夢と現実の間のような、又、何百年も前に、タイムスリップしたような奇妙な夢を……怖い、とはおもわなかった。

梅雨の時期だからしかたないが、雨が降ったり止んだりする日が続いていた。

夜はまだ明けきらない。雨は前日からずっと降り続いていた。

家の外に置いてある金属製のバケツに雨が打ち込んでいる。雨は強く降っているわけでもないのに、バケツに打ちこむ音は大きく、次第に激しくなった。雨の打ち込む音は頭から聞こえてく

るような感じで、やがてドン、ドンと薫の頭と胸を強く打ち続けた。

夢なのか、現実なのか……やがてゆっくりと浮かび上がるように、村の拝所が現われた。御嶽、井泉（カー）、火の神、ノロ殿内、ビジュル・幼いころのかすかな記憶のアシヤギの光景が浮かぶ。くちなしの花の匂いがしたかと思うとおばあさんが現われた。おばあさんは相変わらず、泥まみれの乾いた着物を着ていた。高い背を前にかがみ、薫から届きそうで届かない距離にいた。薫が一步近づけば、おばあさんは一步しりぞくだらう。

「会いに、来て……」

おばあさんは苦しそうな表情でしぼり出すように言った。全身泥をかぶったようなおばあさんは、自分はビジュルの神だ、と言った。

「会いに来て、ほしい」

岩のような顔をゆがめ、しわに覆われた目から涙を流している。ビジュルの神様なのにどうしてこんな汚いのだろう。その疑問に応えるようにビジュルの神様は話し出した。

—その日は十五夜で月が煌々と拝所を照らしていた。流れの早い雲が月を隠して通り過ぎ、現れた月が拝所を照らし、濃淡まだらの雲がたちまち月を隠して通り過ぎる。それを繰り返していた。折しも台風が近づいていた。

酒に酔った三人の村の若者が来て、大声で唄を歌ったり騒いでいる。喧嘩をしているのかと思うくらい大声で騒いでいる。あげくに酔った勢いの肝試しで、台座の上に置かれているビジュルの神様の象徴でもあるダルマの形の石を、やみくもに思いきり、円盤投げでもするように投げ飛

ばした。石はどこに飛んで行ったのかわからなかった。

台風が通り過ぎた。翌日も、その翌々日も、ことの重大さに気付いた三人の若者は、ダルマの形をした石を捜すも見つけることが出来なかった。

いつの間にか以前の石と似たような石が台座の上に置かれていた。

しかし、若者たちが置いたその石には魂が入っていない。若者たちが投げたダルマの形をした石は、拝所を少し下った畑の一角に湧水があり、小さな沼を呈し、年中水をたたえていて、その中に沈んでいるのだと話した。

沼は台風で流れてきた土やゴミで汚れ、石は奥深く埋まった。泥の中に沈んだまま八年余りにもなる。泥をまとったビジュルの神様は無念さをにじませた。

「神様なのにどうして自分で沼から出ることが出来ないのですか」

神様と名がついているのに、神様ならば何でも出来そうなのに、なぜ、勉強もできない、人より優れたものが何もない薫に頼むのか、不思議だった。

「拝所を汚すのも壊すのも人間で、また、きれいにして神の力を強めてくれるのも人間だ。たくさんの人に拝まれれば拜まれるだけ神としての力は強くなっていく。しかし、今の私は神の衣装をはぎ取られ、すっかり力をなくし、人々を助ける役目を果たせなくなりました。私は人によって魂ごと沼に沈められたが、私の魂を救うのも又、人の力でしか出来ない。魂を救ってくれる人がいなければ未来永劫、沼に沈んでいる」

薫は今自分がどういう状況にいるのか、どういう状態なのかわからなかった。ビジュルの神様

の声だけを聴いていた。

「おまえには、私を助ける力があるので会いにきてほしい、そしてもう少し歳がいき、おまえの力が強まったら、沼から魂を救って今置かれてる石に魂を込めてほしい。沼から石を取り出す必要はない」

しわだらけの顔をゆがめ、ビジュルの神様は身をふるわせて泣いた。

ビジュルの神様は方言で話している。それも聞いた事もない難しい方言も混じっている。なのに、標準語になつて薫の耳に届く。その声も、通常話している声ではなく、心の声として聴こえてくる。その声は、たとえひどい騒音の中でも聴くことができるだろう。

七色の光は神の光で、エメラルドグリーンのモヤモヤした雲のようなものとか、打ち寄せる色つきの波は何百年も前から延々と繋がってきた潜在意識に繋がっているような気がした。

薫は、夏休みになつたら早めにビジュルの神様に会いに行こうと思つた。今まで見せられた不思議な夢は、見えるはずのないものが見え、聞こえるはずのないものが聞こえる、考えればあり得ないことだ。薫にビジュルの神様の願いを叶える力があるならば、願いを叶えたいと思つた。ビジュルの神様の指示するとおりに動けばいい。

夏休み前、薫は母に、全身泥をかぶつて汚れたビジュルの神様の事、ビジュルの神様のための事、七色の光の事など、夢の話をした。

母はさして驚いたふうもなく

「人はいろいろな役目を持ってこの世に生まれて来るから、そういうふうには薫が生まれているのなら、行ってきたほうがいいよ」

と、拝所の場所や拝所での挨拶の仕方などをおしえてくれた。

心配することは何もない。今回はビジュルの神様に挨拶にいくだけなのだ。不思議な夢のことに対して、母がそんなに心配もせず、意外な事とも思わず、大変な事とも思っていないことが、薫の心を軽くしていた。

数日後、薫は母に言われた線香、酒、白紙、打紙を買って夕暮れの街を家に向かっていた。

夕やみが濃くなり、夜の気配がたたとよと基地の街は急速にその姿を変えて行く。

一九五〇年代も終わり頃。基地の街の中心にはもうネオンが点きはじめていた。

時をおかず、街にきらめきが走り、ネオンが広がっていく。街路樹の柳にネオンがキラキラ透けて花のよう。着飾った女の人たちとすれ違う。パーマのかかった髪が背中ゆさゆさ揺れている。ギャザースカートのキュツと締めまり、広がった裾は踊っているみたい。軽やかな足取りで通り過ぎる。人形に似ていてきれいだと思つた。

華やかさが増した通りには、やがて近くの基地から兵士たちが押し寄せ、群れるだろう。客を呼び込む声と、店内から飛び出してくる音楽があたりの空気を激しく揺らし、いつもの基地の街の夜が開ける。

街灯や通りの商店の灯りや、漏れてくる原色のネオンの光で、バス停は明るかった。

バス停に十数名の人々がいた。

バス停の端つこで同じクラスの五、六人の男女がひとかたまりになって楽しそうに話していた。どこかに行つた帰りなんだろう。その中には岸本馨もいた。身振り手振りで笑いながら話している。薫はすばやく道をそれた。

夜になつてもまだ青い空に、薄墨の紗がかかり、青が深まり、藍色に染められた空に星がまたたく。

幼い頃に見た空いっぱい星はどこに行つたのだろう。いつの間にその数を減らしたのだろう。幼い頃、頭上に一番大きく輝く星は父の星であつた。薫が生まれた事も知らずに戦争で死んだ父。顔も知らない父は、いつか薫の中で、頭上で一番大きく輝く星になつていた。近いうち、ピジユルの神様に会いに行く事を父に伝えたかつたが、あの大きな父の星は見つからなかつた。

薫は北部行のバスを待つていた。

夏休みのせいかなバス停にいつものにぎやかさはなかつた。

幼いころ住んでいたとはいえ、ひとりで村に行くのははじめての事だつた。押所に行くのもはじめてであつたが不安な気持ちはなかつた。ピジユルの神様が付いて導いてくれそうな気がしていた。

今日の事は、薫の人生に初めて課された役目であつた。ピジユルの神様は薫を指名していた。薫がやるべきことだから、薫が出来る事だから頼んだのだろう。

ビジュルの神様が、薫に会いに来てほしいという事にどういう意味があるのだろうか。慈愛に満ちた目が浮かぶ。泥をまとったおばあさんは薫とどういふ繋がりがあるんだろう。

薫は母に買ってもらった水色のワンピースを着て心もはずんでいた。その場でクルツと一回りして朝の空気を力いっぱい吸い込んだ。肺の奥まで空気が入って気持ちいい。

近くの建物の屋上から十五六羽の鳩が飛び立ち、青空で旋回を繰り返している。

何気なく通りをはさんだ向かいの舗道を見ると、何てことだ、馨が手を大きくふって合図している。間違いない薫に合図している。仕方なく薫は手を振り返す。すると、横断歩道を小走りに走って、薫の方にやって来る。それを見て、薫はめまいしそうになり、立っているのさえおぼつかず、思わずよろけた。

少女雑誌の挿し絵から抜け出して来たかのような少年は、朝陽をあびて、輝いて、澄んだ眼差しで、薫の前で微笑んでいた。

「どこ、行くの」

まともに話した事もない馨と、こんな出会いをするなんて、薫はドギマギしているのを必死で隠しながら、北部の村の名を告げた。

「ひとりで？」

「うん」

いつとき、間をおいて、馨は言った。

「いつしよに、僕も行っていい？」

これはどういう事なんだろう。薫は瞬間ポカンとし、降って湧いたような展開に、何て答えていいのか、混乱して迷いながらも、断る言葉がみつからず、うなずいた。

「天気もいいし、暇してるし、誕生日にカメラを買ってもらったので、何でもいいから撮りたくてブラブラしていたんだ。そしたら、同級生をみつくて……」

嬉しそうな馨の声を、薫は事をあまり理解しないまま、哑然として、ぼんやりした頭で、夢をみているような気持ちで聞いていた。

基地の街の朝は、きらびやかな夜の街から戻されて、灰色の街並みは朝陽を静かに受け入れていた。

鳩の一群は相変わらず近くの建物の屋上を横切ったり、降下したり、上昇したり旋回を繰り返していた。

突如、静かな街に爆音がし、二機の戦闘機が青空にメスでカーブを描きながら、爆音を引きずって瞬時に西方に消えて行った。馨と二人しばらく戦闘機の消えて行った方角を見つめていた。何ごともなかったように、青空は街全体を包み込んでいた。

薫は馨と北部行のバスに乗った。

正直言つて、馨と親しくなろうなんて一度も、夢にも、考えたことはなかった。薫にとつて、それは決してありえない、起こるはずもない、そして望んでもない事であった。でも、今こうして隣にいる。思いがけない成り行きに、薫は自分を必死で落ち着かせようとした。でも、いくら

自分の心を落ち着かせようとしても、平常心にはなれない。同じ名前の為にかかわれて、面と向かって話した事もない馨と、服と服はくつついているし、腕も触れたりしている。馨は何とも思わないのだろうか。

「母の話によるとね・・・」

馨は笑いをこらえながら話し出した。

「僕の馨と言う名前ね、薫にしようか、馨にしようか随分悩んだらしいんだ。もし、薫さんと同じ薫だったら、もっと面白い事になっていたね」

馨はくったくがない、名前の字まで同じだったら・・・考えるだけで恐ろしい。

バスが揺れると、時に私の体は馨の方向に倒れてしまう。馨はビクともしない。

「薫さんの名前の由来は？」

戦死した父が生まれて来る子ども為に残してくれた名前だと話した。

父は薫が生まれた事を知らない。昭和二十年薫は生まれ、父は戦死した。父は子どもが生まれることをとても楽しみにしていて、もしもの時の為に、男の子でも女の子でもいいように、(薫)という名前を残していた。

「あなたの書く字はお父さんゆずりのきれいな字だね」

母は、さしあたって人より優れたものを持ってない薫の、父親ゆずりの字をほめた。

「あなたのお父さんは、役場に勤めていた。生きていたら良かったのにね」

結婚して五年で死んでしまった薫の父親を、やさしくていい人だった、と言った。

「お父さん、戦死したんだね」

寂しい事はないよ、と言おうとしたがやめた。

バスは薫たちの街を通り抜け、近隣の街に入り、人家の少ない町はずれを通り、海辺をはしり、村が現れたり途切れたりの道を走っている。

村が現れて家並みが海と並行して続くかと思うと、山と山の間に入ったり、山と海の間の道になったり、バスは進む。

途中、家並みが多くなっただと思っただら基地と対面した繁華街が現われる。基地が途切れると街並みも途切れる。

遠近に海が見えたり、山が見えたりする。

山も、海も、泰然自若として潔く太陽を受け入れている。巨大なキャンバスに描かれた油絵の世界のよう。

「N城址公園、行った事ある？」

馨の問いかけに薫は首を振った。

「圧倒されたよ。あんな所に、あれだけの城壁を巡らせて……昔の人はすごいと思うよ。それを、あそこまで破壊して……」

馨は言葉を止め、小さく息をした。

「無残に破壊された物言わぬ城壁を見ていると、(昔の光、今いずこ) って感じが胸にせまってくるよ」

薫は、前を向いたまま話している馨を見た。教室などで、垣間見る馨とは明らかに違って見えた。「眼下に広がるあんなに美しい海を、年中戦いに明け暮れていた人たちは、どう思うで見たいんだらう。壊れた城壁のあちこちが茅に覆われて、城壁を吹き渡って鳴る風は、まるで、無惨に死んでいった人たちの悲しみの声のようだった」

開けた窓から風といっしょに白い砂ぼこりが入ってくる。バスは山間を走っていた。

馨は遠くを見ていた。しかし、何かを見ている目ではなかった。時空を超えてどこかを見ていた。そのような表情をしていた。教室で見せる表情ではなかった。今まで一度も見なかったことのない馨だった。

薫はその時、馨と、とてつもなく遠い日に、細い糸で繋がっている気配の中にいた。

つい、先ほどまで馨に対して感じていた気後れ感や、隔たり感がなくなっていた。きょうだいか、同志に感じる心情に満たされていた。

薫は少女雑誌に出てくる藤田ミラノの絵が好きだった。少年も少女も細身で、現実的に存在するはずのない幻想的な美しい顔をしていた。寂しげで、しかし華やかであった。

馨をはじめて見たとき、藤田ミラノの描く少年を思った。しかし、藤田ミラノの描く少年に似た少年がいるはずはなかった。馨は雰囲気少し似たところがあったのだろう。こんなに近くで馨を見ることはなかった。目元は濃い強い線で描かれていた。目元が憂いで、いつもの快活な馨より、大人びて見えた。

「薫さんはN城址公園に行かないほうがいいよ。きつと悲しい思いをしそうな気がする」
薫は元々、出歩くのが嫌いだし、行きたいとも思わないし、行かないだろうと思つた。
けど、行かないほうがいいとか、悲しい思いをしそうとか言う馨は薫の何を知っているのだらう。

二時間近くかかって目的の村に着いた。いよいよだと思つた。

連なる山々は低く、ゆつたりとなだらかに横に広がり、空の青さが稜線をしっかりと形どつていた。

裾野から田や畑、集落へと繋がっている。

山があり、海があり、川が流れ、緑や黄緑色の穏やかな地。ビジュルの神様は、この地で自分の役割を果たしていたのだろう。八年余り前からそれが出来なくなり、存在する意味を、さらに上の神様から叱責されているのだろう。

山と海は向かい合っている。村は山と海にはさまれていた。川を少し下ると入り江になつていて、そのままおだやかな内海につながっている。

馨と川沿いの道を山の方角に向かう。

近くから、遠くからセミの声が押し寄せてくる。カラスが鳴いている。刈り取られた田が続いている。畑には柵のように立てかけた何本かの竹に、生り捨てられた緑やだいたいや朱色のニガウリが、果物の実のようについていた。

川幅は三メートルほどで場所によつては五メートルほどになり、側面は石で固められ、側面の石の間から生えた草が垂れ、先端は水に浸かっている。川石が見える。川岸は草や灌木やユーナの木に縁どられ、所々ネムの木や相思樹が混ざっていた。

ユーナの黄色い花が道連れのように、途切れることなく薫たちに付いてくる。

川と田畑の間の道は、真つすぐ続き、山と山の間に吸い込まれていた。

馨が五歳のころ、この村から母と二人で親せきを頼つて基地の街へ引越した。五歳のころのおぼろげな記憶の山はもつと高かった。川はもつと大きく、深く、流れに勢いがあった。

中学二年になって、薫は以前よりもつと内にこもるようになった。

馨、同じ名前の同級生。同じ名前でなければ、もつと普通でいられたのに、と思う。その馨がこうして近くについてやさしく接してくれている。それは薫に好意を持つての事では決してない。クラスでの馨は誰にでもやさしい。怒つた顔を見たことがない。偶然の成り行きで、嘘のような今だけど、明日は今日の続きには決してならない。薫は自分に強く言い聞かせた。

今はどういうわけか、日頃、天と地ほど離れている馨に、ドキドキすることもなく、普通の状態で接している。薫の荷物はいつの間にか馨の手に渡っている。隣を歩く馨を見る。幼馴染のような、また何年も前からの友達のような気もする。とりたてて話すこともない。話さなくても気づまり感はなかった。馨を特別に意識する必要もないんだと思つた。

道は穴ぼこがあったり、力芝が生え、わたちの跡がへこんだまま山の方へ続いている。集落か

ら放物線状に家は点在し、山裾にあるのは豚舎か、鶏舎だろう。

山裾を左に曲がり、拝所に続くならかな山道を上る。

山肌に大きな木はなく、雑草の中に雑多に低い木々があり、クワズイモの大きな緑色の葉があたりを引き締めている。

セミの鳴き声が押し寄せてくる。強い日差しの中、風がさわやかに通りすぎる。

ヒギリの花の一群が敢然と、道端や山肌の一端を赤く染めて咲いている。

坂道を十五分も行くと拝所にたどりつく。

一帯をさやさやと風が吹き渡っていた。

山の途中に、平坦に広く切り取られた場所に、夢に出てきたアシヤギが佇んでいた。

御嶽は、年数を経た巨木が目立つ。梯梧の木はこぶの固まりのような幹をしている。クバの木も特別に大きい。俗な物の侵入を拒んでいる。風が吹き渡り、見上げる空をも取り込んで、一帯を制していた。

山の途中にあるこの拝所は村を見守っている。眼下の薄緑色の中の集落は、田や畑の中に家々が点在し海につながる。海に沿ってバス道路が白く横に走っている。海は大小いくつかの小島を浮かべ、そのまま絵葉書になりそうだ。

薫はビジュルの神様の前にひざまずく。花をいっばいつけたくちなしの木が目の前にあり、夢を見るたびに発していた香りを漂わせていた。

セメントで造られた台座に、母に言われたとおり線香、打紙、酒を並べた。

くちなしの花は枯れて茶色になってしなびても、枝にしがみつき花を落とさない。薄茶色のねじれていびつな花が台座や周りの草の上に散らばっている。白くきれいな風車の形のまま散ればいいのに、と思う。

「来ましたよ」

薫は両手をダルマの形をした石に当てる。両手から少しはみ出す大きさ。その石を両手で包み込む。いきなり、その石は薫の両手に包み込まれたまま、飛び跳ねるような感じで薫の頭より高く持ち上がった。そして、重さも感じないまま戻った。突飛なことに薫はびつくりしてどうしていいかわからず、再び持ち上げようとしたが、カタカタ動くだけで石は台座を離れない。

母の話によると、ビジュルの神様は（はい）の返事だけするのだという。たとえば、生まれてくる子どもは男の子ですか、と聞くと、そうならば石は持ち上がり、そうでなければ、決して持ち上がることはないのだという。石がかつてに持ち上がったのはビジュルの神様の意思で薫が来てくれた喜びを表したのだろう。

「やっと、来ることができました」

薫はひざまずき、両手を合わす。

「よく来てくれたね」

目をつむったままの薫の前に、汚れて岩のような顔をしたビジュルの神様が現れた。どういわけか、目を開けるとビジュルの神様は見えなくなる。

セミの声は遠くに行き、風の音も聞こえない。

突如、薫は訳のわからない悲しみに襲われた。涙がどつとあふれてくる。せきを切ったようにあふれてくる。嗚咽をこらえ、こらえきれずにエツ、エツ、エツ声を出して泣き出した。体中に涙がたまっていたみたいに、涙と鼻水を流して泣きじゃくった。悲しみに胸の奥がかきむしられる。寂しい、悲しい、切ない、なつかしい、まるで、何百年も会わなかった肉親に会ったような、訳のわからない強い悲しみに襲われて泣き続けた。

異質な空間に薫はビジュルの神様と二人だけでいた。

「私は、永い間、この日を待っていた。神としての仕事も果たすことが出来ず、泥の中に埋まっていたまっ黒い時を過ごしていた。おまえに七色の光を見せたのは私だ。おまえが大きくなるのを一日千秋の思いで待っていた。しかし、今のおまえはまだまだ力がたりない」

岩のような顔をしたビジュルの神様は、顔じゅうクチャクチャにして、しわにおおわれた目から涙を流した。

「今日、おまえが来てくれたことで、私は沼から出ることは出来る。しかし、沼から魂を救って、魂を石に込めない限り、神の仕事は出来ない」

高い木々が影をつくり、枝葉を通り抜けた陽がさざめいて薫たちに白く細かい光を降り注いでいる。

ひとしきり泣いた後、しゃっくりあげながらも、薫は膝の上に置かれた馨のハンカチで涙をぬぐい、鼻水をぬぐい、涙と鼻水が垂れて汚れた服を拭いて、ハンカチをポケットに入れた。

「十七歳になったら……」

ビジュルの神様は、薫をじっと見つめながら言った。

「……きつと、また、おいで。呼ぶから。その時にはおまえの力も強くなっているだろうから」
薫はうん、うんとうなずいて聞いていた。

時を置かず「ああ！」目をつぶったまま、薫は感嘆の声を上げた。

ビジュルの神様が、見違えた姿で立っていた。

白の衣装に身を包み、黒く長い髪は肩の下で束ねられ、顔はおだやかな美しい顔に変わっていた。

目を開けたらビジュルの神様が消えそうで、薫は目を開けることができなかった。

「カフーシ、ヤタン（ありがとう）」

きれいな顔で薫を見つめ、薫を見つめたままビジュルの神様は消えた。

くちなしの香りがあたり一面に強く匂った。

「何て、言ってるの」

通常とかけ離れたことがやりとりされている現状に、心配そうに聲が聞いた。

「十七歳になったら、呼ぶから、またおいでって」

拝所の木々の間から、陽は降り注いでいた。

高い所にある御嶽で風の音がしたかと思うと、風の音よりも早く木々の間を通り抜けてきた風が、あたりの木々を揺らしてふもとに消えてゆく。

薫はもう一度、深く頭を下げて立ち上がった。

枝を大きく横に広げた二メートル以上もあるくちなしの木は、花の咲く時期はとつくに過ぎているのに多くの花におおわれていた。白い花に混じって、枯れて薄茶色になったまま、落ちずにしがみついている花も多い。

くちなしの木の前で、馨と向かいあった。

くちなしの木がさわさわ音を出して揺れ続けている。

香りが波のように押し寄せて来る。あたり一面くちなしの香りが広がった。

刹那、悠久の時の中にいる気がした。

「十七歳になったら、その時、またいつしよに来よう」

馨の言葉に返事はせず、薫はくちなしの花を二つ取り、ポケットに入れた。

「カフーシ・ヤタン」ビジュルの神様の消えた方角を追う。

見上げると、青空に薄いすじ雲が広がっていた。

さやさやと御嶽一帯、風が鳴っていた。

馨と川沿いの道を帰りながら、ポケットに手を入れ、馨のハンカチを確かめる。返さずに一生大事に持っておこう。

これからの日々の中で、どんなに苦しいことや、悲しいことがあっても、今日の日がある限り、乗り越えられるだろう。今日の日の思い出だけで、これからの日々は光彩に満ちるだろう。

大人になった気がしていた。いつきに三つも四つも歳をとった気がしていた。

薫ははじめて自分の将来を考えた。夢を見つけないかと思つた。とりあえず勉強を頑張ろうと思つた。言葉にできない光と高揚感に薫は包まれていた。

山裾の川幅が一段と広くなつたところに堰があつた。そこだけセメントがほどこされていた。巨大ないくつもの石が側を固めていた。

底が見えないので深いのだろう。

ビジュルの神様のきれいな顔を思い出していた。あの泥をかぶつたおばあさんがあんなにきれいな顔になつたことに何の不思議もなかつた。当たり前のような気がした。来てほんとに良かったと思つた。

しばらく行くと、川が水が逆流していた。満潮がはじまつたのだ。水かさを増し、ぐんぐん水が押し寄せてくる。枯草やごみを浮かべ、水は川上に向かつている。

川は青空を映していた。水面を白い雲が流れている。川に浮かぶ青空は、水の中でも、見上げる空の高さと同じく、果てなく遠くにあつた。

勢いづいて増幅した流れは、所々で小さな渦を巻き、枯草や小さなゴミを巻き込みながら上流に向かつている。

ユーナの花が二つ三つ五つと川に映つた青空の上を流れていく。

所々でユーナの花は五つ六つの固まつた輪になり、渦に巻き込まれ、渦の中で踊っている。ユーナの花の色が赤っぽいのは、昨日散つた花なんだろう。

川岸のユーナの木は入り江まで続いている。所々、両岸から川に倒れこむように、枝を茂らせ、花は今、盛りを迎えていた。

入り江はマングローブ群に制され、内海は幾つかの小島や岩が配され、波をやわらげている。

ユーナの花は陽が傾くと黄色に渋い赤みが加わる。赤く円熟味を増した花は、ポトリと川に身を委ね、川を下り、入り江にたどり着き、マングローブ林にとどまる、満潮になると又、川に押し戻される。

絶えることなくユーナの花が上流に向かっていく。所々で渦に巻き込まれ、渦から一つ抜け、二つ抜け、音も立てず、上流に向かっていく。堰の方まで行くのだろうか。そこでは、おびた、たしい数のユーナの花が一つの輪になり、クルリ、クルリ踊っているのだろうか。

小魚の群れが黒い縞模様を描き、形を長い帯のようにしならせながら、絶えることなく、永い帯を引きずってひたすら上流に向かっていく。どこまで行くのだろうか。

馨と二人水かさの増した川をじっと見ていた。

絶えることなく流れていくユーナの花を見ていた。

帯のようにしなりながらいく小魚の群れを見ていた。

川に映った青空を見ていた。

何かを見ていた。

二人とも黙ったまま見ていた。

いくつになっても、何年たってもこの川の情景を忘れることはないだろう。

太陽はまだまだ上にあり、強い日差しに萎えた草木が、夏草の匂いを発していた。薫はふと我にかえる。

暑い日差しの中、すずしい風が吹いていた。時々けたたましい声でセミが鳴いた。

川沿いのユーナの花に見送られながら歩く。

ぼやっと生きてきたな、と思った。

二つのくちなしの花、押し花にして手作りの額縁にいれよう。

今日の日は封印しよう。それは悲しいことではない。

天の啓示のように今日はじめて考えた自分の将来のために。頑張らなければならないことがいっぱいある。夢のような今日の馨とのことは自分の意識から遠ざけよう。それは決して寂しいことではない。むしろ自分が頑張る基にすればいい。

今日の日が濃い分だけ頑張れそうな気がする。

降って湧いたような今日の日は、つまらなく生きてきた薫の起点になる日だろう。馨に感謝しなくてはならない。

将来、めざしていた自分になったとき、夢がなくなった時、今日の日をなつかしく思いだすだろう。夢に向かつて頑張る自分が見えてくる。薫にとつて馨はそういう存在だったのだ。夢を現実させるための礎みたいなものだ。

ひよっとしたらピジユルの神様からの贈り物かもしれない。

このような日は一生の内でも今日だけだろう。

馨と薫の腕は付いたり離れたりしている。自然に手をつないだ。何の言葉もいらなかった。手を振って歩きながら歌でもうたいたい気持だ。

木々や建物の間から見える行く手の向こうにマングローブ群が見えた。その向こうに見える海は、青色と銀色に揺れながら、キラキラ光っていた。

小説部門

奨励賞

淡い声

新垣 未月

放課後、時間割から解放された生徒達の喧騒から逃れるように図書室に入る。紙やインクや埃の混ざった独特の匂いが部屋の外と中で空気の質量を変える。重い扉を閉めると廊下のざわめきがすつと遠のいて、自分だけ隔絶された空間に飛び込めたように安心した。一番奥の窓際の席に座ると、全身を覆っていた薄いガラスみたいな緊張がそつと解けていく。こうやって一人本を読むのがこの頃の日課だった。

いつものように本を開く。顔を上げると、窓の向こうにちょうど校門を出ていく冬子の後姿を見つけた。セミロングの髪が風を受けて舞い上がる。彼女とは一年の頃から同じクラスで、仲が良かったのだけれど、あることをきっかけに疎遠になってしまった。

学校には様々な不文律があるものだけれど、中でも大きいのは、教室のあちこちにある透明な壁だと思う。スカートの丈やリボンの大きさや部活動によって、その人がいてもいい空間は決まっ

ている。そうでない場所に足を踏み入れると白い目で見られる。立場に自覚的でなければ教室では生きていけない。同じ空間にいて仲良くしていたはずの者同士が不意に離れていくのはきつと少しいびつだ。

以前までいつも一緒に帰っていたにもかかわらず、一人で歩く冬子の姿を見ても不思議なくらいに感傷はわかず、以前の関係に戻りたいとは思えなかった。私は彼女に対して怒っているのだろうかと考えたけれど、どんなに探しても自分の中にそういう強い感情は見当たらなかった。さざ波さえ立たない心でふいに自覚する。私はあの時、傷ついたらんじゃない。ただ、失望しただけなんだろう。

いつそ怒ってれば、きちんとぶつかって本音を言うことができたのかもしれない。だけど、私はあきらめきつていて、冷めすぎていて、今更彼女に何か言う気にはなれない。けんかの後の仲直りという分かりやすい関係の修正さえできない。

ため息を吐いて本に目を落とす。窓から差し込む光の鋭さに夏の気配がする。去年冬子と一緒に行った夏祭りに今年には行かないのだろうかと思う。二人ではしゃいですくい上げた屋台の金魚は、しばらく部屋の隅の水槽を泳いでいたけれど、そういえば今はもういない。いつ死んだのか記憶が曖昧だった。気づけば私の中で、冬子との思い出はきらめきを失って急速にぼやけている。大したことはないと思っていたあの出来事が、実は決定的な線引きの瞬間だったことに私は随分経ってから気がついた。

ページをめくった時小さな紙が目に入った。本の間に挟まれたそれは、誰かが葉として使った

のを抜き忘れて、そのまま返してしまったようだ。私は何の気なしに四つ折りにされていた紙を開いた。白紙だろうと予想していたのに、ところどころ手書きで小さな丸が書かれているのを見て首をかしげる。メモや落書きには見えない。何の意図で書かれたのか分からない。

左下に小さく74と数字が記されているのを見つけてひらめく。

これが挟まれていたのは74ページと75ページの間だった。ために、そのページに重ねてみると本の片面と紙の大きさはびったり同じだ。丸の位置にある文字をつなげて読めば意味が通る暗号のようだ。

少しワクワクしていた。小学生の頃、よくこういう遊びをしたものだ。暗号をいくつか用意し、一つ目の暗号を解くと次の暗号のありかが示されるようにセッティングして、ゴールにお菓子やシールなどを宝物として置く。自家製のトレジャーゲーム、または脱出ゲーム。

さすがにお菓子やおもちゃはないだろうけど、これもそういう類のゲームかもしれない。私は答えが次の場所を示すものになっているのを頭の片隅で期待していた。誰かがふとした思い付きで作った遊び道具を見つけたつもりでいた。

しかし、完成した答えを見て言葉を失う。胸の内側に冷たいものが滑り落ちていく。

た・す・け・て

メモの丸印が重なる文字を追うとそう書かれている。これは何だろうと首をかしげる。見つけた人を怖がらせるための怪談めいた悪戯だろうか。でも、考えるとなんとなく違うような気がして、それを打ち消す。行き場のない思いが吐き出されたもの。ノート隅に書き殴って、あとで

冷静になって苦勞して消すような言葉ではないか。

激しく感情的になってしまふ瞬間というのは、まああることで、何らかの形にすることは気持ちを静めるための一の手段だ。

でも、その形がストレートすぎると恥ずかしく感じるくらいには、私たちは子供じゃなくて、ブライドと自我が強い。感情を他人にも見える形にするときに、一度俯瞰して自分を観察したり、気持ちにワンクッション入れたりという段階を踏む。だから、どうしようもない衝動は、詩や小説になつたり音楽になつたり、絵になつたりするのだろう。

この場合、暗号は感情と理性との衝撃緩和剤の役割ではないだろうか。

ノートに書き殴る「たすけて」と、面と向かつて人に話す「たすけて」と、誰に届くとも分らない暗号の「たすけて」とでは全く意味が違ふ。

メモを見返す。小さな丸がいくつかあるだけで他には名前も何も無い。書いた本人も、見つけた誰かが本気で助けてくれるとは思っていないだろう。SOSを向ける明確な対象はなく、感情の消化のために作られたものだと考えるほうがしっくりくる。私はその残骸を手に立ち尽くしていた。無視するのが正解だろうと思いつつも、なんとなく気になつてしまった。

私はしばらく迷つて、メモをもとに戻してその本を借りて歸つた。

昼休み後の国語の授業では、先生の声と黒板にチヨークを打ち付ける音が高らかに響いていた。みんなぼんやりと気怠げで、その音が途切れたらゆるゆると溶けていきそうな午後だった。

私はじつと前を向きながら、頭では昨日の暗号のことを考えていた。本を家でじっくり調べてみたけれど、他のメモも手掛かりらしいものもなかった。後で図書室で探してみよう。もしかしたら他にもあるかもしれない。

ゆっくりうねる怠慢な空気を察したのか、先生が不意に数名を指名して教科書を音読させる。私も呼ばれたので、自分の番が回ってくるかと教科書を手に立ち上がる。読み終わって座ろうとしたとき、背後で誰かがぼそつと言った。

「あいつ、しゃべれるじゃん」

蔑みの響きが混ざる声に、一瞬固まる。それは確かに私に対する言葉だった。ぐつと唇をかむ。聞こえなかつたふりをして、教科書を目を落とす。やけに大きな心臓の音と火照つた体が気になつて、次の子の音読は全く頭に入つてこない。

自分でも、なぜこんなに動揺しているのか分からなかつた。

私はある日を境に話すことが極度に苦手になつた。書いてあるものを読み上げたり、挨拶やちよつとした声掛けなどテンプレート通りの会話ならできる。でも、普段のやり取りや自分の意見を求められる場になると、どうしても声が出せなくなることがあつた。

喉元まで言葉は出かかっているのに、それを声にするための、最後のたつた一握りの勇気が足りない。いつも、もう少しで言えそうなのに、相手の怪訝そうな顔や苛立つ様子を目の前にすると、ますます萎縮して声が引つ込んでしまう。今まで当たり前でできていたことだけに、自分でもどうしてできないのか不思議だつた。これを飲めば思うように声が出るようになるよと適当

な薬でも差し出されれば、もしくは誰かが催眠術でもかけてくれればあっさり治るようにも、何をしたって強情に駄目なようにも思えた。

クラスメイト達は私の異変に気づきだしている。あの子、しゃべれないみたいだよ。時々、そこそと交わされる会話を耳にする。心配するような口調の場合と、事態を面白がっているような雰囲気の場合との割合は半々くらいだ。

普段は心臓や動脈がどこにあるかなんて考えもしないのに、こういう時は嫌と言うほど意識してしまふ。不愉快な脈動に、声が出なくなつたあの日のことを思い出した。

その時、私はトイレの個室にいた。女子トイレの手洗い場にはよく人が溜まつて、お喋りをしたり鏡を覗き込んだりしている。その時も外は騒がしかったけれど、いつものことなので初めは気に留めていなかった。

「じゃあさ、冬子に頼もうよ。あの子仲いいじゃん」

唐突に発せられた冬子の名前にはととする。含みのあるはしやぎ声に嫌な予感がした。私は鍵を開けようとしていた手を止め耳をそばだてた。また別の声がする。

「何がいいかな」

「筆箱ならすぐ気づくんじゃない？ 梓菜、なくなつてるの見たらどんな反応するかな」

知っている声だった。クラスを中心グループに属する女の子達。中でも、リーダー格の勝気そうな子と彼女と仲のいい二人の顔が頭に浮かんだ。自分がターゲットになつていられるらしいと、はつきりと状況を理解する。外で交わされている相談は、冬子に私の筆箱を隠させようというものだった

た。

どくんどくと心臓の音がうるさくて、個室の壁が急に頼りないものに思えてくる。あり得ないことは分かっているけれど、外にいる子達に聞こえてしまったらどうしようと思える。私はずぐ近くにいることがばれたら、どう考えてもまずい。

だけど同時に、聞いていたことを彼女達に知らしめたい気持ちにもなった。勢いよくドアを開けて、驚く彼女達を睨みつけてしまえたら、これから起こることを防げるのではないか。しかし、クラスを中心に立つ彼女達は発言力も周囲への影響力も強い。そんなことしたら、後でまずい立場に追いやられるのは間違いなく私のほうで、数でも気の強さでも勝ち目はない。

こういうことは唐突に起こる。いじめと言うには大げさな質の悪い遊び。明確な悪意があつての嫌がらせではなく、こういうことしたらあの人どんな反応するかな、という好奇心から行う悪戯。

された方がいじめだと思えばいじめだなんて言う人がいるけど、現実にはそんな理屈は通用しないことが多いんじゃないだろうか。子供だけの閉鎖的な小社会では権力者の示す価値観は絶対だ。スカート丈は膝上じゃなきゃダメだし、トイレへは何人かで連れ立って行くのが常識だし、二重瞼じゃない子は問答無用で可愛くないし、悪口は言ったもの勝ちだし、物を隠したり嘘の告白を仕掛けたりなんて娯楽の範疇で、それをいじめだと騒ぎたてる人は頭おかしい。これが小さな小さな空間に蔓延る正義。

たとえ親や教師を味方につけたとしても、ここに帰らなければならぬのだから意味はない。

無駄に騒がずあきらめて耐えるほうが賢明だ。理不尽だと牙をむくよりも適応してしまう方がはるかに楽だ。

声が遠ざかって行ってもしばらくじっとしていた。誰もいないことが確信できる長い沈黙の後によりやくドアを開ける。ひび割れた鏡に映る自分の顔がひどく強張っていた。無理にほほ笑んでみる。排水溝からドブの匂いが漂ったような気がしたけれど、一瞬だけだったからきつと気のせいだ。廊下からにぎやかな笑い声がしていた。彼女達のひどく楽しそうな声を思い出して深いため息を吐く。

運動部に所属していて、明るく華やかでいつも何人かでつるんでいる彼女達と、静かであり目立たない質の私との間にはあまり接点がない。とはいっても席が近くなつた子と言葉を交わすくらいの交流はあつて、決して関係が悪いということではなく、誰かに反感を持たれる覚えもない。だから、本当にただ娯楽の対象にされただけなのだろう。嫌われることはなくても、決して対等に見られることはないのだと気づいて胸の内に暗い何かが広がっているのを感じた。

その日のうちに、机の中に入れておいたはずの筆箱が消えた。覚悟はしていたけれど、胸の奥が締め付けられるように痛んで、指先が冷たくなつた。

形だけ机の中や周りを探すふりをしたあと、近くの席の子にシャーペンを貸りる。さつき筆箱忘れてきちゃつたみたい、と笑つて言い訳をする。

さつきトイレで話していた三人の他にも誰が係わっているのか分からない。誰が今、私を観察しているのか。慌てたりショックを受けている素振りを見せれば彼らは私を面白がる。悪い意味

で気に入られるとこういうことが長く続いてしまう。だから陰で話のネタにされるような口実は極力作りたくなかった。動揺を悟られないように振舞いつつ無難な対応をしなければならぬ。

神経を尖らせて過ぎた一日の終わりに、私は冬子に声を掛けた。筆箱を盗ったのが彼女かどうか確かめたかったが、もしそうだとしても責める気はなかった。

隣に座ると、冬子は落ち着きなく目を泳がせたように見えた。関係のないお喋りをした後、ふと思いついたみたいに、

「そいえば今日、筆箱を」

と口にする、冬子は明らかに狼狽した。それを見て口をつぐむ。その一瞬で彼女がやったことを確信してしまつたから、慌てて続ける言葉を変える。

「移動教室のときに忘れてきちゃつたみたいでさ。ずっとまりちゃんにペン借りてたんだー」

取り繕つた明るい声は白々しく聞こえたけれど、それでも冬子は安堵の表情を浮かべたので、ああこれでよかつたんだと思う。嘘を吐くこともできず、認めてしまつて自分の都合のいいように言い訳してしまえるほど器用でもない彼女を、追い詰めて傷つけるようなことはしたくなかつた。

仕方がなかつたのだと思う。さつきトイレで話していた子達は、私を今回のターゲットに選んで、筆箱を隠すことにしたけれど、さすがに大っぴらにそんなことはできない。いじめではない、あくまで悪戯やからかいの範疇で収まるように行動する。彼女達が私の机に手を突っ込んで物を持っていくのは不自然だ。でも、仲のいい冬子なら見た人も私の了承があつたことだろうと考

える。

彼女達の頼みを受けた冬子を義理を欠いていると責めることはできない。些細な遊びであるそれに協力することを拒めば、それをいじめだと捉えていることになる。彼女達を悪者扱いすることになる。それは反感を買うのに十分で、本格的な嫌がらせが起きるきっかけになってもおかしくない。

それでも、私の机から筆箱を奪い取ってどこかに隠したり、彼女達に渡す冬子の姿を想像すると、喉の奥がジュツと熱くなつた。だけど、彼女のやったことを裏切りだと捉えて、これ以上みじめになるのはもつと嫌だから、必死に込み上げて来る言葉を呑み込む。冬子の顔を見ると、他の道はなかつたのだろうかと考えたくなることに気づいて、さりげなく視線を窓のほうに逸らす。本当に仕方がなかつたのだろうかと自分に言い聞かせた。窓の向こうに雲一つないペンキをぶちまけたみたいなき青空が広がっていた。なにもかもが馬鹿らしかった。

私がうまくしゃべれなくなつたのはそれからだ。異変を感じたのはその翌日だった。何人かでアイドルグループの話をしていて、梓菜は誰が好き？ と話を振られた。迷うようなことでもなかつたのに、答えようとすると片隅に躊躇する自分がいた。声を出そうとしても、うまくできない。静かに動揺していた私は友達のを、大丈夫？ という呼びかけで我に返つた。その場はどうにか曖昧に笑ってやり過ごした。不自然な空気を漂わせてしまった自覚はあつたけれど、どうしようもなかつた。

二、三日後に筆箱は何事もなかつたかのように机の上に置かれていたけれど、数か月が経つた

今でも声は出ないままだ。あの時冬子に思ったことを言えていれば、こんなことにはならなかったのだろうかと時折考えるけれど、呑み込んだ言葉が何だったのかももう思い出せない。あの、のつぱりとした不安になるような青空に吸い込まれて、青いペンキで塗り消されてしまうイメージがぼんやりと浮かんだ。

視力が弱くていつも前の席に座る冬子の背中を私は無意識に見つめていた。ふと、あの暗号の主は冬子じゃないかと思う。メモが挟まれていた本の作者は私が好きな小説家で、冬子はそれを知っている。もしかしたら、彼女なんじゃないか。それは甘い空想だった。もしそうなら、冬子も私も同じ声にならない言葉を抱えていることになる。そして、私は彼女のそれを受け止めることができるのだから。

しかし、本気でそう信じているわけではなかった。この学校の生徒は五百人ちよつとなので、確率は五百分の一。作者のことだけで彼女だと決めつけるのは性急な話だし、第一、毎日のように図書室に入り浸っている私はそこで彼女の姿を見たことがない。

その日の放課後、私は二枚目の暗号を見つけた。図書室で昨日と同じ作者の本をばらばらめくつていると、同じようなメモが挟まっていた。遠くで吹奏楽部がトランペットの音出しをしていて、間の抜けたファンファーレのようだった。

私・を・さ・が・し・て

昨日のメモと見比べてみると丸の書き方や筆圧の感じが似ていた。同じ人物によるものだと考えていいだろう。

西日が射して手元を照らした。視界がオレンジ色に染まる。探すよ、と強く頷きたくなった。本当はただの悪戯で真剣な意味なんて微塵もないのかも知れない。それも分かっているけれど、顔も声もない誰かのその言葉を追いかけてみたい。上手く形にならない思いがこうやって微かな言葉になって現れたのなら、それを無視したくなかった。

そのまま貸出カウンターへ向かう。ヒントがあるとすればこの本の中から家でゆっくり読むつもりだった。カウンターの向こうに座っている人物に気がついてはっと息を呑む。同じクラスの子だった。あのとときの三人組のリーダーじゃない方。

いつもは、各自で本と貸出カードについているバーコードをピッと読み込んで手続きをするのだが、機械が壊れているらしく、図書委員がバーコード下の数字をパソコンに打ち込んで貸出手続きをしていた。

本とカードを手渡して、うっすらと日に焼けた手がキーボードをたたくのぼんやりと眺めながら、そういえばこの子は図書委員だったんだなあと思う。あまり読書をする印象はないので少し不思議だった。本を受け取るときに小さくお礼を言うと、低いハスキーな声でどういたしましと返す。

図書室を出るとどつと力が抜けて、ああ緊張していたんだと、小心で臆病な自分に苦笑した。別に悪い人じゃないのは分かっているけれど、あんなことがあってからはどうしても、苦手だという気持ちが染みついて離れない。

それから数日が経った。探しても新しいメモは見つからず、本の中にも手掛かりらしいものはない。初めから自分のやっているとが独りよがりなのは分かっていたけれど、時間とともに相手の存在の輪郭がどんどんぼやけていくようでもどかしい。

教室のあちらこちらで人が集まっている。いつものメンバー、いつもの場所、決まったグループ。互いに干渉し合うことのないその風景を見てみると、やはりその間に透明な高い壁が立ちほだかっているように思える。「ヤマアラシのジレンマ」という言葉を思い浮かべる。針毛に身を包むヤマアラシは寄り添いたくても、針毛で互いを傷つけてしまうため、思うように近づけないというジレンマ。人間関係においても、相手に近づきたくても傷ついたり、傷ついたりしてしまう可能性があるから近づけない葛藤があることや、そのために適度な距離が必要であるという例え話だ。

壁はそういう距離感を保つためのものだろう。異なる価値観や個性に触れることは自分を否定されるリスクを伴う。同時に、相手を否定してしまう可能性もはらんでいるけれど、私達は未熟で、相手を傷つけないよう配慮することよりも自分が傷つかないように防御する方を優先する。傷つけられるくらいなら、相手を針で突き刺すほうを選ぶだろう。私は今刺されているのかもしれないと思う。

チャイムが鳴って皆が慌しく散り散りになって席に着く。人が集まっていた場所の机と椅子だけが爆心地みたいに乱れている。

「今日は一〇二ページから」

先生の指示で教科書を開いたとき、目に飛び込んできたものに心臓がはがねを打った。私には心当たりのない、四つ折りの小さな紙が挟まっている。慌てて開くと、そこにはやはり小さな丸が数個書かれていた。ドキドキしながら教科書と照らし合わせる。

ご・め・ん・ね

そつと前を見る。一番前の席で冬子は俯いてノートを取っていた。その背中に心の中で問いかける。ねえやっぱりこれは冬子なの？

授業の進行はクラスごとに少しずつ違う。私の教科書に、しかも今日確実に開くページに挟んであったのだから、暗号の主はこのクラスの人で間違いない。

メモを見つけたのが私だと気づいた冬子があの時のことを謝った、そうではないだろうか。

早く事実を確認したくて、私はやきもきと時計を見上げた。シンプルで事務的なそれには秒針が付いていなくて、急いだ心には針が止まって見えた。ようやく授業終了のチャイムが鳴った瞬間、私は勢いよく立ち上がって冬子のもとへ歩いて行った。

何日も話せていなかったけれど、そんなこと障害にはならない気がした。右手につかんだメモの存在を確認する。これさえあれば、きつと以前のように話せる、きつと前の関係に戻れると自信が持てた。

とんとんと彼女の肩を軽くたたき、見上げた顔がなんだか懐かしい。一度深呼吸する。それでもやはり最初の言葉を出すのに苦労した。

「冬子、あの、手紙……」

ようやく出た声はとぎれとぎれでかすれていた。それでもこれさえ言えば彼女はすぐにびんときて反応するだろうと思っていた。しかし、冬子は不思議そうな顔をしたままで、その顔が手紙って何のこと、と尋ねていた。

大丈夫、大丈夫と呪いみたいに自分に言い聞かせて作ったバリアが剥がれ落ちていく。視界が段階的に明度を落とし、言葉が詰まる。喉の奥に蓋がされて一切口から音が出せなくなる。

「ねえ冬子、ちよつと一緒に職員室行かない？」

他の子の声が二人の間のおかしな沈黙を破った。最近冬子とよく一緒にいる子だ。冬子は頷いて、私の方を気がかりそうに振り返りながらも教室を出ていった。

冬子じゃ、ないんだ。

私は俯いて自分の席に戻った。息が苦しい。右手に握ったメモはもうただの紙切れに成り下がって、力を与えてくれることはなかった。浮かれていた自分が馬鹿みたいだ。色褪せた視界の中で、窓の外の平坦な青空がこの前とよく似通っているのが暗示的でむやみに腹たたい。

た・す・け・て

目を閉じると手書きの小さな丸と印刷された明朝体の文字が重なって瞼の裏に映る。誰かを助けることは、そのまま、助けてほしかった自分に手を差し伸べることだった。声のないこの暗号の主を見つければ、自分自身を救う手立てが見つかるような気がしていた。

た・す・け・て

それが自分の言葉になって胸の奥に沈み込む。今度こそはつきりと自覚する。私はメモの主が

冬子だったらいいと思っていた。ずっと冬子に助けてほしかったのだ。いつまでたっても声が戻らない不安の中、どんどん圧迫されていく教室の中で冬子の存在を出口を見つける可能性のように感じていた。

だけでも話せないのかもしれない、と落胆とともに蓋がより強固に閉まってしまったような気をする喉をさすりながら、私は俯いた。

午後から雨が降り出した。降水確率二十パーセントの天気予報を嘲笑うかのようにころりと表情を変えて見せた空模様を横目に、薄灰色の廊下をふらふらと通り過ぎて図書室に入る。頼杖をついてぼんやりと俯く。自分がどうするべきなのか、何をしたいのかよく分からなくなってしまうた。

微かに聞こえてきた音色に顔を上げた。図書室ではたまにBGMとして小さな音で音楽を流している。おそらく、司書の先生の気まぐれなのだろう。クラシックやジャズ、邦楽のオルゴールアレンジなど、リラックスできる音色という共通点はあるもののジャンルは様々だ。

今日流れているのは合唱曲のピアノ伴奏。いつもは特に気には留めないけれど、その時間こえてきた曲には思い入れがあった。

去年の合唱コンクール時冬子は伴奏者に選ばれた。その時の演奏曲だ。放課後に音楽室で練習すると言う彼女について行ったことがあった。

小さい頃からピアノを習っていたというだけあって冬子はとてもうまかった。何回か練習を繰り返しただけで全く狂いのないなめらかな演奏に仕上げてみせる。

私は時々自分のパートのメロディを口ずさみながら、彼女の指の動きを目で追っていた。迷いのないなめらかな動きと、羽毛が舞い上がるみたいにふわっと腕を持ち上げて再び鍵盤に手を落とす仕草がきれいで見ていて飽きることがなかった。

それを言うとき冬子は、

「えー。そこは動きだけじゃなくて、音で感動してもらわなくちゃ」

悪戯っぽく言つて、深呼吸をした。彼女らしくなくちよつと悔しそうな顔をしていたなど訝しんでいると、冬子は再びピアノを弾き始めた。

鳥肌が立った。空気が変わったのを皮膚で理解する。ワンフレーズ目でさっきまでの演奏とはまるで違うことがはつきりと分かった。一音一音が鮮明で全体としてもきれいに整っている。でも、リズムや強弱の正確さなんて彼女には当たり前だったんだ。その上にすさまじい表現力をのせてもなお、音を意のままに操つてしまえる。さっきまでの上手だなという印象が桁違いなレベルで上書される。

主旋律の後ろで低音の層が一定のリズムで遠のいてはまた寄せて来る。今まで気づかなかつたけれど、これは波の音を表現しているのだ。

演奏が終わっても私はしばらく呆然としていた。ただ、すごいと何度も何度も繰り返して聞いた。こんなの、すぐもつたいたいと思う。冬子はこの曲を手を抜いて弾かないといけない。音楽の授業で、ふざけてわざと音を外す男子や、パート練習になるとおしゃべりを始める女子を思い出す。冬子の本気の演奏に、どんなに頑張っても私達の合唱は見合はずがない。伴奏という曲

としては不完全な状態でも彼女はあたかも主役のように引き立てられるのに、伴奏者の役割りを担う以上、大してうまくもない合唱の引き立て役にまわらなければならぬ。

こんなに上手だなんて、知らなかった。

冬子はぼんやりとしている私に微笑みかけて、プロになりたかったのだと話し始めた。

小さい頃から毎日何時間も練習して、たくさん賞を取った。この調子ならプロのピアニストになるのも夢じゃない。先生にそう言われて本当に嬉しかったと言う。しかし、ある日走って来た自転車にぶつかり事故に遭ってしまふ。転んだ時に手を車輪に巻き込まれ、指に怪我を負った。

「それで諦めることにした」

「でも、こんなに上手なのに」

そう言った私に冬子は右手を広げて見せた。

「リハビリしたんだけどね、元には戻らなかった」

よく見ると小指が外側に曲がっていて、他の指と比べて動きがぎこちない。日常生活にはほとんど支障をきたさないであろうそれが、ピアニストになるには致命傷なのは想像に難くなかった。冬子は終始淡々とそれを語った。彼女が本気だったこと、それまでに相当の努力を重ねてきたことは明らかなのに、諦めたと言う声には悔しさも感傷も感じられない。私に話したことが、自分の身に起きたことを消化して受け入れるためでも、ヒロイズムの快楽に浸るためでもないことにはつきり分かる口調だった。当時の私は彼女が何を思っているのか分からなかった。

でも今なら分かる。強がりでも何でもなく彼女は割り切っていた。好きなものを大切にする方

法が、執着し続けることだけではないと彼女は知っていた。

もしかしたら、私の驕りでなければ、冬子は私に対してもそうだったのではないだろうか。

ピアノを弾いているときの冬子は虚空の何かを見つめていた。その目線が何かを捉えていることは分かるのに、すぐ隣にいる私にはそれが見えない。物質的なものではなく、彼女の内側に広がっている景色のようなものを宙に投影しているみたいだった。きっと冬子はその何かを形にするために私にピアノを弾いてくれたのだと思う。

窓の向こうに傘をさして校門を出て行く生徒の集団が見えた。モノクロやパステルカラーばかりの中に、一つ、鮮やかな赤い傘が凜と揺れていた。それだけが臉の裏に残像として残った。

「梓菜さん」

名前を呼ばれて振り返ると、あの三人組の一人、図書委員の子が立っていた。瞬きをすると赤い傘が彼女と重なるように震えた。

明日乃という名前、バスケット部に所属していて、低くてハスキーな声をしている。あまり話したことがないから、そういう表面的な情報しか頭に浮かんでこない。それに加えて、筆箱の一件があつたものだから私が彼女の姿を認めて最初に感じたのは、不信心と緊張だった。

何？ という問いかけも口にするのが難しいような気がしたので、黙って首をかしげる。図書室だし、声を出さないことを不審がられたりはしなかったようだ。明日乃は隣に腰かけてこちらに体を向けた。そして、何の前置きも無しに一人の小説家の名前を挙げた。それは、私の好きな小説家、そしてメモが挟まれていた二冊の本の作者だ。

「梓菜さん、好きなの？」

問いかけた明日乃の顔をまじまじと見つめる。そこで初めて相手の顔にも緊張が浮かんでいるのに気付いた。

まさか、と思う。訊ねたいことはたくさんあるのに、口を開いても声が出せない。不自然に口をパクパクさせていると、明日乃はふと何か思い当たったように、カバンからノートとペンを取り出した。白紙のページを開いて、少し戸惑いながらこちらに差し出す。

対等に見られてはいないと思っていたから、その対応は全くの予想外だった。からかいや、一方的に用件を言うだけではなく、きちんと会話する意思があるのか。

ペンを走らせながら、そういうえば、話せなくなつてから人ときちんと対話したことはなかったなと思う。一つ一つの会話をどうすれば無難に流せるのかに必死だったから、あまり本心を話すことはなかった。

筆談という方法があるのは自分でも分かっていたけれど、話せないことを認めて弱みを周囲にさらけ出すようですつと抵抗があった。でも、今はそんなプライドがどうでもよくなるくらい、何が起きているのか知りたかった。

——メモを入れたのは明日乃さんなの？

明日乃はノートに書かれた私の字に目を走らせた後、頷いた。表情は少しぎこちないのに、眼だけが力強い光をたたえている。

「そう。私が挟んだ。やっぱり気づいていたんだね。図書室のは二枚とも梓菜さんが取ったの？」

頷くと、相手はそつかあと呟いて、遠い目をしながら椅子にもたれかかった。何かを、話すか話すまいか迷っているようだ。私は話の流れが全然予測できなくて、静かに彼女の横顔を見つめて黙っていた。

明日乃は、いつも教室の真ん中で笑い声を立てている時とは別人のような憂いを帯びた面持ちで言った。

「今更こんなこと言われても不愉快かもしれないけれど、私、梓菜さんに謝らないといけないことがある。二か月前くらいに筆箱がなくなったことがあるでしょう。あれ、私達のせいだったんだ。本当にごめんなさい」

さつきよりも数段強い光の宿る相手の目を見つめながら、驚きとともに胸に暖かいものが込み上げて、体から力が抜けるのを感じた。対等に向けられた言葉は驚くほどに暖かくて柔らかかった。

ノートにペンを走らせる。ほんの少し指が震える。

——いいよ もう気にしてない 謝ってくれてありがとう

明日乃はそれを読んでホッと表情を緩めた。私はその下に新しい文字を連ねる。

——あのメモはどういう目的？

「あれは一緒にいられる人を探すためのアンテナ。

今、つるんでいる子達と一緒にいるのが辛くなってきたんだ。無理に笑うのには疲れてしまっ
たし、本を読むの本当は好きなのに興味のないふりをするのが面倒くさくなった。居場所だと思

えたことがないなと気づいた時、もう無理してここにいるのはやめようと決めた。

でも、急にグループから抜けて一人ぼっちになる勇氣はなかった。だから、気が合う人を探そうとした。

あのメモは本当は気休め程度のものであった。好きな本に暗号を仕掛けた時は、同じものが好きな誰かが見つけて解読してくれたらいいなって期待していたけど、そんな人そうそういるわけないと思つてた。

でも一応、図書委員の朝の当番のときに毎回チェックしていたんだ。一冊がなくなつた直後に、梓菜さんがもう一冊を借りていったから、もしかしたら分かつているのかもしれないと思つて、確認する目的もあつて教科書にメモを挟んだ」

明日乃は、まさかこんなふうまくいくとは思わなかつたよと呟いた後、口をつぐんだ。心地よく体に染み込む静けさに私達は包まれていた。

「梓菜さんはどうして私を探してくれたの？」

微かに震える声に答えようと口を開くけれど、やはり言葉は出てこない。それを説明するためには長い時間がかかる。それでも、私は珍しく相手に自分のことを知ってほしいと思つた。

気がつけば雨は止み、晴れ間が覗いている。それを眺めていると耳の奥で波の音がするような気がした。冬子の低いピアノの波だ。

まだ、声は戻らない。だけど、戻つた時には冬子にピアノを弾いてと頼もうと思つた。きっと

彼女は私を見捨てたりしない。その時まで待っていてくれる。彼女のきれいなピアノの音を思い起こして、私はそう静かに確信した。

窓の外から弱い光線が降り込んで、淡く発光したノートの余白が眩しく目に沁みた。強い風が吹いたような気がして、私と明日乃の間に立っていたはずの透明な壁が倒れて粉碎するのを幻視する。壊れた壁の向こうの景色は眩い光にまみれて、よく見えない。

高くて厚いと思い込んでいた壁はこんなにも脆いものだったのだなあと笑う。それを明日乃に言ったら分かってくれるだろうか。

私は再びペンを取った。祈りにも似た強い想いが自分の中にあつた。

くだらなく思うのにどうすることもできないしがらみや、窮屈な壁の存在や、こうして声が出なくなってしまうこと。いつかは必ず過ぎた景色になる。壊れた壁の向こうにちらりと見えたのは未来だった。時間軸によらない、微かな、ただど確かに存在する未来。

いつになったら解決するのか、楽になつて忘れられる日は来るのか。そんなのちつとも分からないままだ。それでも強く確信する。私達は今を全部超えてあの場所へ行ける。光の先へ、自身も弾けるように輝きながら走つて行ける日がきつと来る。



詩部門

最優秀賞

違ったもの

秋雨 一也 / 81

奨励賞

心の海色

綾村 湯葉 / 84

一九九九

葬 ヤマメ / 88

ぼうやのせかい

あさとよしや / 91

悲しき炎

青木 仁奈 / 94



*

*

詩部門

最優秀賞

違ったもの

秋雨 一也

無色透明

無味無臭

濡れたり

触れている感覚すら無く

視覚と聴覚でしか存在を認識できない水が、膝から下を満たし

硝子天井から顔を覗かせて照らす月明かりが

水面と四方の壁、そして佇む僕の体の表面を

妖艶に踊り乱れる

目的もなく部屋の中を歩き回り

どれだけの時間を費やしたか、思い出せないほど

繰り返し続ける自問自答の言葉が漏れ出てる

少し喋ることが苦手なだけ

人の雰囲気の色と香りとして感じるだけ

物事の見え方と捉え方が違うだけ

刹那の先のことを予測してしまいがちなだけ

ピンぼけていることが多いけれど、記憶を写真にしているから、変化に気づきやすいだけ

自分なりに他人と異なっている部分を知っているだけで

人からどう観られているのか

興味を持つてくれている人が、皆無と分かりながらも

毎日毎時毎秒気にしてしまう

レモンバームと苔の香り纏う僕の

心の中で飼っていた黒の細い棘が動き出し

全身を駆け巡る赤い環状線に呪いとして混じり込み

いつ植え付けられたか感染経路が分からないまままた犯され

幾ばくかの後、その事実を受け入れ

輪郭線を失い霞となる

だが、人間ならざるモノになり果てても
何故か、人間である自己の存在証明を行い続けており
その行為全てを認識することが出来てしまう

月明かりが雲で陰りをみせ

記憶もゆつくりと燃え消えた

着衣が濡れている

霞の身体になつてからは

触れられ、冷たさを感じることが出来た

湧き出す憎悪と

水位が勢いよく増える

僕をいとも簡単に飲み込み、硝子天井を突き破らんとする水と同じく

人であり、獣としてなり得る存在で溢れた現実は、醒めることのない夢の中と知る

詩部門

奨励賞

心の海色

綾村 湯葉

普通とか常識とか当たり前という言葉が
何よりも怖くなつたのはいつからだろう
どんな悪意よりも
無意識が恐ろしい

神様なんていないんだ
だって、誰が見たと言うの
こんなに願っているのに
もしいるとしたらあれだね
傍観者気取りお疲れ様です

俺たちが苦しむのを見て楽しんでんだろ

誰も彼もが人間を評価する

そんな資格、ありもしないのに

他人からの目を気にして

自分らしさなんてもう無くなった

求められるままに「自分」を作り上げる

その結果がこのザマさ

取り繕うこともできなくなつて

外に出ることすら嫌になった

くじらになりたい

誰よりも大きくなつて

プランクトンとかを食べて

ゆつたりと泳いで

たまに人間に観察されたりしても

そんな些細なこと、気にしないような

くじらになりたい

ずっと前から
慢性的に死にたくて
みんなそうなのだと
思っていた

風の源流

虹の根っこ

知ることはできないのに
いつかは見てみたい
なんて、言う相手もない

泡が水面に浮かんで消える
それを眺める
夢と希望も浮かんで消える
それを諦める
だって、どうしろと言うのだろう

自分が唯一だとか

そんなこと考えるはずもないけど

どこにも属せない私は

そのたった二文字に縋ることしかできない

ただ多数派ではないだけで

存在すら問われる

慣れてしまえたならよかったのに

毎回律儀に苦しむ

終わりを見つけたい

見つける努力はしないけど

神様でもなんでもいいから

身勝手に助けてほしい

詩部門

奨励賞

一九九九

葬 ヤマメ

一秒、ぶつちぎって行く所詮高度一九九九産まれの五体満足。落下の速度に身体を歪められ脳のみが異様に発達してしまった俺たちは二〇〇〇年を生きること避けられなかった哀れなチルドレン。地に着く前から背中に爆弾を埋め込まれ一秒ごとにカウントダウンをされる。設計図に残ったインクの窪みが血液となり俺を作っていくのか？ それだけか尊い生命怒りの血管は常に震わされている。俺はその震えを怯えたど勘違いしたくない。蜂よりは大きくて鳥よりは小さい心臓には毛も牙も目玉も生えている。誰も見抜けないこれはリーサルウェポンに、と言ったままで最後まで使わずに終わっていくんじゃあ嫌だ。「最期は産まれた時よりもよっぽど生命じみた声でもあげて炸裂させてやる元年」子供たちは怒らない、つもりだった。一秒ごとに記録に接続し32Gを、64Gを、ふかす

映像の中の虚構は連続的なのに現実はどうにも尻切れで生命は突如消えゆくため、残された

俺たちはいつしかシリアルの当事者。言葉を、言葉をと繰り返す他人から向けられ続けるマイクロフォンに苛立つなら頭を引つ挿んで殴ればいいのに、そして「最期は産まれた時よりもよっぽど生命じみた声でもあげて炸裂させてやる元年」とでも言えばよい。流星は一秒で流れ切つて願ひ事に貸す耳なんかない！（或いは光速を振り切つて落ちる屑の言葉は暴風的な時間のラグに阻まれて聴こえていけないだけ）いずれにせよ俺たちは誰の言葉も聴こえない。そして取り尽くされてもう何の言語も残されていない現代

アイデンティティは形容しきれない時代の誤り、「#希死念慮」俺たちは（私たちは）、もういつぞ檸檬の木にでもなりたい。ネオンライトは遠く現代、青い路上を過ぎゆく救急車は現代、消した画像を復元するときは現代、共感覚で心を痛めるバラエティは現代

なんて無欲なチルドレン哀れな子供たちは木にも風にも水にもなれない今日も四畳半では二十代が冷え切つて硬直していくそしてその冷たさが冬を創り出す。彼らが残る場所はベルソナのみで、手垢を混ぜ合わせた商材として「二十代」とラベリングされていく。秒針の音はそのニュースを無邪気に運び、それを目にした俺たちはまた怠惰に尖り続けていく。白く錠剤輝く星、流れる音楽は何とか帝国？ ロング・ロング・アゴー一九九九、産まれ直しはできないって先に教えてくれよ。性と愛の猿真似ヒットソング狂おしいほどに俺たちは人間だから鉛になれない鋼の心。溶かして涙になつたらきつと勝てるよ俺たちでも、つてメルトダウンしていく現代社会の溶け残りにサラバ！ 飛び上がる速度は自動車も戦闘機も爆風も振り切る振り切る振り切る！ 俺だけは振り切つてみせると手汗まみれの掌を

埃っぼい寒空に翳す。声なんか聴こえていなくても構わないと風の中にて見えたのは残り物
現代恐ろしき負け組その全て

詩部門

奨励賞

ぼうやのせかい

あさとよしや

おそらはまつさおまぶしくて
しずくがひとすじ

まどをすうつとおりてゆく

それをみつめるぼうやのひとみ

ぼうやのやさしいおかあさん

きべらでなべをかきませる

そのなかにはくずゆがぐつぐつ

ときがとまったようなひるさがり

ゆげでくもったまどべでうとうと

たゆたうひかりが

ぼうやをつつむせかい

あかねぞらにじがかかれば

ぼうやとおかあさんはふたりして

しばらくおそとでたそがれながめ

やがてくらくなりまして

たのしいおとうさんかえつてくれれば

ぐあいはどうだとあたまをなでて

かぞくはなかよくおうちにはいり

くらやみをおそとへとおいだします

にゆうはくしよくのあかりはこうこう

こうふくがとわに

ぼうやをつつむせかい

こんやもとけいのおとがちくたく

こんやもとおくのおそらにヘリコプター

おめめをばちりとあけたぼうやは

くらいまどべにたちまして

まつくろなよるのおそらを見あげては
いつまでもながれほしをさがします
こんなにも

しあわせなぼうやにも
ほしにねがうことが
あるのでしょうか

ちいさなほしのように
ささやかなかがやきで
なにひとつ

ふあんのないせかい
そんなひびがいつまでも
そんなせかいがいつまでも
あなたのもとにありますように

詩部門

奨励賞

悲しき炎

青木 仁奈

若者はいつだって

激動の時代に揺れ動く

悲しき炎

やるせなせは煙となって

空高く雲になる

学び舎を卒業すれば皆雲の上に乗って

風に流されながら地上の炎を見るだろう

色とりどりの美しい炎は

今を生きる為に命を燃やしているのだと

今なら理解できる

大人達は、炎が燃えすぎて
彼らが地上で燃え尽きないように
時には激しい雨風を降らせていた
いくら恵の雨だと言いつても
若者にとってそれは
痛み伴う散弾だ

「そんなの散々だ」
よく聞くフレーズだなんて
きつと彼らは露知らず

それでも若者はきつと痛みを抱えながらも
風に吹かれて生きていける
人は思ったより強いのだ

哀愁は抗えないこの支配をサバイブした

君が手に入れる勲章なのだ

叙勲式では哀愁リボンを胸をつけ

学園祭で聞いた青春ソングを歌った

その歌詞が、声が、

共感から思い出に変わっていた

僕らは涙した

悲しき炎は煙りながら

自ら流した涙で消えていく

その残煙はまるで、ジュース缶の蓋を開けた時に上がる白い霧の様
力の抜ける、やるせない気持ちそのものだった

勲章をつけた大人達がわずわらしいなんて

もう思えないよ

これからは、僕らも雲の上で

コーヒー缶を飲みながら
地上の悲しき炎を鎮めていくのだ

君の痛みも分かるよ

僕らがわずわらしいのも知ってるよ

それでも君に、より良く生きて欲しいから

フォークソングを口ずさみながら

若き炎に雨を降らせていく

たとえ否定されたとしても

どうか君は、僕らの様にはならないで

未来を照らす

美しい希望の炎になる事を

願っている

短歌部門

奨励賞

ひとりでも姦しい

翼をください

Yellow

夕焼け空

花火よ、日々よ

かねしろ葉衣 / 99

元澤 一樹 / 100

安 堂 / 101

新垣 幸恵 / 102

田淵 将也 / 103

*

*

短歌部門

奨励賞

ひとりでも姦しい

かねしろ 茉衣

お姫様なれると信じ生きてきたこの心こそチャームポイント

おしゃべりくそ女なので三十一文字ぼつちにまとめるの無理

「かわいい」に囲まれ生きていくんだと積まれた耐ハイ横目に嘯く

おしながき仕事仕事仕事仕事枯れる休日ねえ休めてる？

お湯入れて出来る幸せなら要らないわ「やば今の私かっこいい」

短歌部門

奨励賞

翼をください

元澤 一樹

借りてから一度も読んでない本を返すみたいな法事の旅行

踏まずともよいクリボーを踏みたれば無情なるかな我のスコアは

「カナリアの焼鳥です」と卓上にただの焼鳥置かれる食べる

食物の連鎖 生体ピラミッド 理科の授業で学ぶニンゲン

とめどなく流れる時に埋もれ逝くぼくが化石になる朝の月

短歌部門

奨励賞

yellow

安堂

飽きもせず手紙をしたため送り合う化石なんだと、俺もお前も

堂々と仏頂面のガマガエル腹に小蠅の屍積もる

俺たちは見て見ぬふりで甘えてた捨てられたんだよ文化もろとも

再会と無事を祝い合う宴の場山羊の瞳をじつと見ている

風はなくなつた細くなる道の果て奥へ進めど届くことなく

短歌部門

奨励賞

夕焼け空

新垣 幸恵

ブラウスのボタンの糸のまたほつれ繕い頼む妹の目さみし

一年の月日は嘘のように過ぎ車椅子にて笑う妹

月曜は夫婦の日なり妹を見送る朝のスロープたたむ

左手を器用に使い妹はルージユをひけり夫来る前に

新しきマンションへ越す妹夫婦空夕焼けて二人を包む

短歌部門

奨励賞

花火よ、日々よ

田渕 将也

いつもそばにいるはずだった妻に（子に）今日はひよこ豆の和え物を

お荷物を両手に迷う病棟は雨の匂いの届かない国

海を越えて面会できぬ姉たちの刹那の笑みを照らせ花火よ

苦しみを代われぬ午後の陽はふかく祖母のLINEは短くつよい

日々という奇跡のなかの嬰兒は海中道路の風をみつめる



エッセイ部門

最優秀賞

マンガーの季節

大井 輪子／105

奨励賞

私は蛹

我が家のイノシシくん

二 森山 高史／116
藤 111



*

*

エッセイ部門

最優秀賞

マンゴーの季節

大井 輪子

一 奄美

「今年のはあんまり甘くないね。」

その夏のマンゴーは酸っぱかった。高校三年の夏、私は叔父の家でマンゴーを食べていた。奄美大島出身の私は、高校卒業までの十八年間で奄美で過ごした。親戚もみな近くに住んでいたし、奄美を出る機会といえば、部活の遠征くらいだった。奄美市は、名護をもう少しばかり田舎っぽく感じた。田舎とはいっても四万人ほどの人口規模で、生活に必要なものには何一つ不自由しない。近所とのつながりも強く、沖縄と同じようにゆったりした雰囲気の流れる、人の温かさが魅力のふるさとだ。

奄美ではマンゴーが特産品で、知り合いの農家が分けてくれることが多かった。親元にいた幼い頃から、自分で買って食べることはなかった。だから、市場に並ぶマンゴーとその値段を見て、こんなに高いのかと驚いたものだった。奄美で食べるマンゴーは、こちらから求めなくとも、親

や親戚から当たり前のようには与えられる身近な果物だった。そのため、なおさらその価値を特別に意識したことはなかった。

高校の最終年度、進路選択の時期に差し掛かると、地元とギャップを感じる都会が怖いという理由から、私は奄美から距離が近い沖縄への進学を決めた。両親は特に反対しなかった。むしろ、「飛行機に乗れば一時間で帰れる距離だね」と喜んでくれた。新生活への期待を胸に、私は沖縄へと飛び立ち、奄美を離れた。

二 沖縄

沖縄での新生活は、最初こそ多少の不安はあった。けれども、時間が過ぎるとともに、一人暮らしにも次第に慣れていった。奄美とさほど差のない名護での暮らしは、私にとつてとても心地が良かった。人見知りの私は、大学でうまく友達ができるか不安だった。でも、名桜大学には沖縄県外からの学生が半数いて、嬉しいことに日本全国からの友人ができた。生まれてからの十八年間を狭い奄美の島の中だけで過ごしてきた私には、沖縄で出会ったすべてが目新しかった。

それでも、ホームシックは時折ふいにやってきた。その時、私を救ってくれたのは、地元からの贈り物だった。母親が送ってくれる地元の食べ物や短い応援のメッセージ。十八歳の私には、それがとても、とても心強かった。

夏には、叔父から奄美のマンゴーが届いた。叔父夫婦には、子供がいなかった。だから、姪の私をものすごくかわいがってくれた。寡黙だけれど物知りで優しい叔父が、私は大好きだった。

そのマンゴーは、「食べたくても自分で買えば高いだろうから」と、叔父が送ってくれたものだった。奄美にいたときは特別感などあまり感じなかったマンゴー。叔父夫婦の顔を思い出しながら、マンゴーの皮をむき、ひとくち頬張った。その日のマンゴーは、不思議と甘酸っぱく、特別な感じがしたことを覚えている。離れてこそわかる大切な何かを、私は味わっていた。

私はもともと外国語に興味があった。そして、一年次に履修した中国語がきっかけとなり、海外留学に行くことを決めた。留学試験を受けて、私の留学先は台湾に決まった。この私の決断に対して、両親は「遠く離れた国に行くわけではないし」と、心配しながらも応援してくれた。距離的にはさほど離れるわけではなかったけれど、国境を越えて外国に行くから、そう頻繁に、簡単には帰れないことはわかっていた。でも、留学は一年間に限ったことだし、何より、海外生活は自分にとって必ずいい経験になる。私は、沖縄へ来た時以上に期待を胸に抱いて台湾へと向かった。

三 台湾

台湾での留学生活は、とにかく毎日が刺激的だった。中国語を学ぶだけでなく、海外の友達と知り合うことで、将来の目標を私に与えてくれた。それは、外に向かって挑戦を続けていった私にとって一番幸せな経験となった。

台湾でもやっぱりマンゴーが有名だった。特に、マンゴーかき氷は海外からの観光客が必ずと言っていいほど食べて帰る「台湾スイーツ」の代表格だ。台湾で初めてマンゴーを食べたのは、

留学先の大学が始まってすぐに、現地学生が連れて行ってくれたかき氷屋だった。マンゴー自体は奄美でも沖縄でも何度も食べていたし、私にとつては食べ慣れた味のはずだった。それなのに、その日は一段と甘く、なんだか希望の光があふれ出る、甘い太陽のような味がした。留学に来たばかりで高揚した気持ちや、これからの生活への期待がそう感じさせたのかもしれない。

台湾の物価は日本に比べて安く、特別贅沢をしなければ、日本よりはるかに安く生活できた。台湾では、マンゴーも日本よりずっと安く手に入る。日本では贅沢品で手が届かないような値段なのに、そのマンゴーも、台湾では学生の私でも自分で買って日常的に食べられるフルーツだった。与えられるのではなく、自分で買って食べるマンゴーは、なんだか大人を感じる味がした。

一九四五年まで日本の統治下にあった台湾。その台湾には、日本語を話せる年配の人も多く、街並みや文化、そのところどころに日本統治時代の面影がちりばめられていた。台湾で知り合った人たちは日本に友好的な人が多かった。これは留学前から聞いていた話ではあったが、実際に台湾で生活すると、台湾人のやさしさを肌で感じる事ができた。台湾でマンゴーを食べながら、日本統治時代の台湾のことを考えたりもした。当時の沖縄や奄美から来た人たちも、日本語が使われている台湾で、今の私のようにマンゴーを食べていたのだろうか。想像は膨らんだ。

奄美と沖縄と台湾。時代とともにさまざまな力が押し寄せ、支配を受けていた点では通じるものがあると感じた。台湾での生活は、私に語学力以外の多くの宝物を与えてくれた。外国人の友人と過ごすうち、日本にいた時には知ることのなかった考え方や価値観に触れる事ができた。台湾で、私は自身の成長を感じ、新しい自分に出会う事ができた。

四 叔父の死

二〇一八年の六月のある日のことだった。私は、留学先の友人たちと旅行でベトナムにいた。楽しい旅行の最中、奄美の叔母から国際電話があった。「入院中の叔父の容体が悪化した、もうどのくらい持つかわからないので会いに来てくれないか」という内容だった。電話を受けた私は、電話口で取り乱した叔母の様子から、事の重大さを理解した。楽しかった旅行も、叔父の容体のことしか考えられないまま台湾に戻った。けれども、交換留学が残り二週間ほどだったこともあり、帰国後すぐに会いに行こうと、叔父の無事を祈りながらも、ただちに帰国することはしなかった。

その三日後、叔父は亡くなった。

私にとって、近しい親戚を亡くすのは保育園の時以来だった。帰国して奄美に会いに行けば、以前と変わらずに叔父が待つていてくれるような気がしていた。だから、突然の叔父の死が信じられなかった。私は留学を終えると、地元に戻り、真っ先に叔母のところに向かった。そこで私を迎えてくれたのは、疲れ切った表情の叔母と、叔父の遺影だった。

「ああ、もう叔父には二度と会えないんだ。」

私はその時、やっと実感することができた。せめて、沖縄に行く前にもっと多くの時間を叔父と過ごすべきだった。私は心の底から後悔した。

叔父の四十九日が終わった。その後も、叔母から電話を受けた時、なぜすぐに奄美に帰らなかつ

たのかという後悔が私の中で続いた。大事な人との別れが人を強くする。そう言う人もいるけれど、私にはいまいちピンとこなかった。強くなったというより、前に進まなければどうしようもないから、どうにかその別れをやり過ぎず、という感じだった。

大好きだった叔父の死に目に会えなかった私。でも、新たな変化を求め、さらなる成長を求める者は、慣れ親しんだ人やものと、ずっと同じ場所と一緒にいることはできない。私が奄美を出て、沖縄、そして台湾へと移動したのは、何よりも私自身が成長するためだった。叔父はどう思っ てくれていたのだろうか。最後にそばでお別れができなかったけれど、叔父は私が取ったその選択を理解してくれていただろう。叔父は、私の成長を心から喜んでくれていた。だから、離れていても、きつと外国で頑張る私のことを応援していてくれていたはずだ。そう考えるようにしてからは、心がだいぶ軽くなった。

「叔父さん、見て。あんなに青かったマンゴーが、こんなに赤くなったよ。今まで本当にありがとう。」

叔父が亡くなってから最初の夏、私は奄美でマンゴーを食べていた。叔父のいない家で叔母と二人、叔父との思い出を語りながら。その年のマンゴーは、叔父の生きていた頃の奄美で、そして沖縄や台湾で食べたどのマンゴーよりも、甘く熟した味がした。

「今年のマンゴーはすごく甘いね。」

エッセイ部門

奨励賞

私は蛹

二
藤

クワガタの幼虫を育てることにしたんだ。

十九歳の誕生日に三匹。近所にある、コインランドリーと併設された昆虫店で選んだんだ。幼稚園の頃にクワガタの成虫を育てていたことがあったけれど、幼虫から育てるのは初めてだ。昆虫が敷き詰められた瓶を見ていると、駄菓子屋で水に浮かべられた綺麗なマーブル模様の風船を選んでいる気分になった。幼虫のショーウィンドウはあまりにもキラキラしていて決められなかったから、昆虫店のおじさんに話を聞いてみた。

「オオクワガタは臆病で自分から攻撃しないし土から出てこないんだぞ。それとは違い、ヒラタクワガタは凶暴で下手をすると指を噛まれるかもしれないな」

おじさんは、少年のように目を輝かせて教えてくれたんだ。その話を聞いて、私も臆病だから臆病者同士だと一生土から出てこないんじゃないかと途端に怖くなった。それならば、私と正反

対の方が気が合うんじゃないかと思つてヒラタクワガタに決めた。

「好きな番号、三つ教えて」

おじさんが急にそんなことを言うからなんでだろう、と不思議に思つたけど、どうやら幼虫は三匹まで選べるらしい。だから、私は誕生日の数字「五、二、七」にした。本当に駄菓子屋にいるみたい。紐付き飴を選んでいる気持ちになつたな。プリンカップに入った幼虫は、親指の爪ほどの大きさで、菌糸瓶という容器に移すとき潰してしまいそうで慎重に運んだ。

「そうだ、名前を付けよう」

菌糸に開けた穴でうごうごとしている幼虫を見て私はひらめいた。一番小さな幼虫は、隣の家で生まれた赤ちゃんの名前「ブンタ」、食欲旺盛で沢山食べている幼虫は、名字が「平田」でいじられていた友人を思い出し「ひらべー」、一番大人しい幼虫は「しずちゃん」にした。

そういえば、クワガタをなせ育てようと思つたか言つていなかったね。それは、至つて簡単な理由だ。「成長」をこの目で見たかつたんだ。四月から大学生になつたけどコロナという感染症が広がったことが理由で、入学式が中止になり授業もパソコンの中で、同級生の顔も知らない。自分が前に進んでいるのか後ろに下がっているのかも分からないんだ。同級生の中には、就職先が決まつて毎日出社している子や結婚した子、上京して頑張つている子もいる。私だけが何も成長出来ていないような感覚になつたんだ。勿論、大学のオンライン講義は出席していて様々な分野を学んでいるよ。でも、一日中家の中にいるから大学一年生という実感はまるで無いんだ。これは私だけじゃないことは分かっている。きっと日本中、いや世界中で同じような生活を強いら

れている人は沢山いるんだ。そんなある日、感染症と闘う日々が年単位になるというニュースを見て、ふと「目に見える形で成長する何かが欲しい」って思ったんだ。クワガタは雄だと一年で成虫に、雌だと半年ほどで成虫になるんだ。成長していく姿を見れば何か感じるかも知れない。そんな漠然とした考えだった。大学一年生の間で成長を見届けられると知り、育てることが楽しみになった。

クワガタの適温は二十度から二十五度なんだ。だから、保冷ボックスに入れて保冷剤で温度を調整する。この作業を一日に二回行うんだ。

「何時間か置きに面倒を見るなんて子育てしているみたいね」

私がいそいそと冷蔵庫と保冷ボックスを行き来する姿がおかしかったのか、母は笑いながら言った。そう。母が言う通り、幼虫の世話をする内に愛情が湧いてきたんだ。クワガタの幼虫は、芋虫のような見た目でうねうねと動き回る。どちらかというと気持ち悪い方だね。けれど私にとっては、その気持ち悪ささえも愛おしく思えるのだ。菌糸瓶の回りは菌糸に覆われている。常に幼虫の姿が見える訳じゃない。だからこそ、オレンジ色で革靴のような艶がある頭が土の間から見えたとき。小さな類を懸命に動かして菌糸を食べているとき。無事に成長していることが嬉しく思えると同時に愛おしいんだ。それに、幼虫は放置していると死んでしまうことがあるんだ。常温で暫く置くとキノコが生えてくる。これは元々、菌糸瓶はキノコ培養に使われているためだ。キノコが育ち、空気穴を塞ぐと窒息する恐れがあるから定期的に取り除かなければならない。キノコも成長しているんだ、ごめんね。心の中で、そう呟いてからキノコをスプーンで掘り起こす。

ざくざくざくざくざく。新聞紙に並んだキノコと瓶の中にいる幼虫。どちらも毎日、成長していた。それから数週間経って、私に高校の図書館でアルバイトをしないかという話があった。元々、司書に憧れがあった私は喜んで受け入れバイトを始めた。バイトは書架整理や受付案内、消毒作業が主である。部活に励む生徒や受験勉強のため図書館の自習室に通っている生徒の姿を見られる日々は新鮮だ。自宅でオンライン授業と課題に追われていた日々にはんの少しだけ彩りが加わった。クワガタの菌糸瓶を見ると親指の爪ほどだった幼虫が親指ぐらいになっていた。クワガタの幼虫は、「初令」、「二令」、「終令」、「蛹」を経て成虫になるんだ。親指ぐらいの大きさは、二令の初めぐらい。バイトを始めたことが、成長と言えるのか分からないけれど幼虫たちと同じように少しだけ育っているような気がしたんだ。

今、幼虫たちは蛹になっている。蛹の形を見ると、ブンタも、ひらべーも、しずちゃんも皆メスのようだ。蛹になると死んでいるかのように全く動かさず、不安になる。成長しているのかかわらないこの姿を見て、思ったんだ。私は蛹に似ているのではないかということ。蛹はゆっくり、ゆっくりと成虫になるため準備をしているんだ。自ら幼虫の姿を溶かし、新しい体を作り上げていく。その過程を見ると、成長している感覚がない今の私も準備期間であって欲しいと思うようになった。それは、単なる私のエゴかもしれない。縋り付きかもしれない。去年までの大学一年生に比べて、私は大学生らしい成長が出来ていないはずなんだ。異例づくしで暗中模索しているこの一年は成長していないんじゃない。新しい体になるための準備期間なんだ。

今日も、クワガタは蛹のまま成長している。そして、私も蛹のまま成長している。

ゆっくり、ゆっくり。羽化するために。

エッセイ部門

奨励賞

我が家のイノシシくん

森山 高史

家の近くにイノシシが、よくやって来る。

この手の話は盛られていることが多く、「よく」という曖昧な言葉は、受け取る側と発信する側で温度差がある。「外国人がよく訪ねてくるよ」と私が言うとき、それは年に一度あるかないかのことをいう。だが、このイノシシの件は、冬場の一時期は、ほぼ毎日毎晩のことだ。夏場でも、月に何度かの頻度だ。よく来る。

「近く」というのも、道から見えたとか、藪で物音がしたということ盛っているわけではない。我が家の敷地や、駐めてある車の脇を闊歩しているのだ。窓のすぐ下まで来たこともある。

毎年、連中は代替わりし、その年その年で、個体の性格が異なる。生態の違いというべきか。深夜にウロチヨロするやつがいる。決まって明け方に見かける大物がいる。いつも二匹で行動する兄弟もいる。共通しているのは、我が家の周辺を散歩コースにし、庭も駐車スペースも、鼻で掘りまくることだ。

我が家は、いわゆるポツンと一軒家。山から続く、緑の真ただ中にある。そこそこ広い敷地の周囲は、我が家で行き止まりになる細い道を除けば、全て雑木と藪でおおわれている。イノシシにとっては、山と里を結ぶ経由地になる。

敷地に続く藪の中には、何本もの「ケモノミチ」ができています。勘違いされがちだが、雑草が生い茂る荒れた小径がケモノミチではない。イノシシの身長で、雑木雑草がくりぬかれたトンネルのミチだ。人が立ったままの位置では発見しにくいのが、少し屈むと、見事な長いトンネルが見つかる。荒れているわけではない。整備された「獣道」だ。新旧合わせて、十本以上が我が家につながる。ロープや板で封鎖しても無駄で、すぐにバイパスが作られる。

連中を見つけたら、追い払ってはいる。棒を持ち、近づきながら、「コラアッ！」と威嚇する。たいていは、慌てて逃げて行く。毎回、その繰り返しだ。「こらあ」以外に、脅す言葉が見つからない。「オイ」とか、「ダメ」とか、いかにも弱い。柿泥棒を見つけたシチュエーションでもそうだろうが、日本語では、「こらあ」としか叫ばないと思う。

夏の夕暮れなどに、「うり坊」が単独で歩いているところを見かける。体に瓜のような縞模様が入った幼いイノシシだ。母親から少し離れてしまったようだ。そんな愛くるしい相手でも、見つけたら脅しはかける。数ヶ月で大きくなるので、幼少期にトラウマを与えておけば、独り立ちした折は、我が家を敬遠してくれるだろう。ただ、うり坊に向かっては、「コラアッ！」ではなく、「こら。」と優しくなってしまう。私は、そこまで非情なニンゲンではないのである。

庭で野菜は栽培していない。我が家は、芭蕉布の工房を兼ねている。庭にあるのは、バナナの

木と同類の糸芭蕉の木ばかりである。その木から繊維を採り出し、糸に撚り、布に織る。形態はバナナそっくりだが、実は小さく固く、人間にもイノシシにも、食用には決してならない。

イノシシの目当ては作物ではなく、土そのものだ。被害ということでは、庭のいたるところが掘り返されることにつきる。身の危険を感じることは、ほとんどない。

ただ、一度だけ怯んだことがある。夢中で穴を掘っている親子を見つけ、例のごとく「コラアツ！」と迫った。子ども三匹は、猛スピードでトンネルへ逃げ去ったが、母親が逃げてくれない。しばらくこちらを見て、私と対峙する形になった。動転した。想定外の事態で、次にとるべき動作が分からない。棒は下げたままだ。数秒して、ようやくママイノシシは向きを変え、ゆっくりと去って行った。去っていただいて、ほっとした。

連中の穴掘りは、通説のようなミミズ捕りなどではなく、鼻を地面にこすりつけるのが快感なのだというのが私の見立てだ。そこにミミズはいないはずの固い土を好んで掘っている。そんな固い土地なら、奥に広がるやんばるの森のどこにでもあるだろうに。どうも、草刈りされた地面が楽に掘れて、お気に入りようだ。私が苦勞して草を刈った、そこそこ整っている庭を掘りに来る。わざわざ。

駆除の対象になつているので、役場などに連絡すれば、退治してくれるかもしれない。畏が仕掛けられるだろう。ハンターが登場する可能性もある。

穴ほこだらけになるけれど、被害はそれだけだ。埋め直せば済む。埋めれば、すぐにまた掘り返されて、「いのししごっこ」になるが、寛容になつている。銃殺の協力なんてすることになつたら、

非情なニンゲンになってしまいそうだ。連絡は、していない。

森へ戻りなさい。ここを掘っても、私の「コリアアツ！」が待っているだけで、いいことはない。ここは、私のテリトリー。よそで暮らさない。森の中で心置きなく掘りなさい。うり坊たちにも、そう教えなさい。姿の見えないところで、互いに、ストレスなく生活しましょうや。ね、イノシシくん。



俳句部門

最優秀賞

古い嘘

森山 高史／121

奨励賞

生きてゐる

輝 龍明／122

花虻よ

本村 隆信／123

他人行儀な風

金城 理子／124



*

*

俳句部門
最優秀賞

古い嘘

森山 高史

爽やかや大言壮語のなかゆくい

老犬が妙に甘える今日の月

粛粛と書類を捨てる夜半の秋

宵寒や古い日記の古い嘘

機を織る君の気だるさ冬隣

俳句部門

奨励賞

生きてゐる

輝
龍明

星生まれ星に死のあり花福木

靡かざるもののひとつに椰子の花

コンクリに冬瓜ごろり生きてゐる

初秋や生き方見直す屋籠りヤクマ

蟋蟀の声に磨かれゆく夜かな

俳句部門

奨励賞

花虻よ

本村
隆信

花虻よ花の命を知つてるか

恐々と二百十日の甘蔗きびの村

ひと色の日本列島大暑かな

東洋の嘉手納基地見ゆ夾竹桃

初明りして呱呱の声老いの声

俳句部門

奨励賞

他人行儀な風

金城
理子

秋のまち 王冠被った風が吹く

季節背負う 草木の陰の鈴虫や

爽やかに葉に残る朝 揺れる木々

秋高し 木々のすき間にある水晶

夕暮れのすました顔の秋の風



琉歌部門

最優秀賞

たひら はやと／125

奨励賞

謝花 建松／126
宮城 真也／127



*

*

琉歌部門

最優秀賞

夜闇来る船

たひら
はやと

嘉例吉ぬ渡波屋 屋部村ぬ風水 昔アマミクが 立ていてい置ちえさ

ヒートウ岩拌む シマぬ海御願 三線ぬ音に 波ぬ遊ぶ

受水や受きてい 走水や走らち 歌ぬ揚ぎ下ぎや 咽喉に乗してい

老松ぬ炬火 浜に焚きちきてい 夜闇来る船に 津口知らし

ウドウイガマしぬでい 暫し腕組みば んかし世ぬ遊び 耳に響ち

琉歌部門

奨励賞

うりずんぬ季節ぬ 山原ぬ山に 伊集ぬ花白く 夏やがてい

寄し言や宝 子ぬ達道踏まち 親ぬ真心や 肝に染みてい

歳重に重に 喜寿ぬ歳迎ゑてい 灘安き人世 思る願てい

なゆるむぬやりば 恩納ナビー行逢てい 恋ぬ情花 咲かち見欲さ

今帰仁ぬ城址 桜花柔く 色清らく笑てい 咲ちゆる嬉さ

謝花 建松

琉歌部門

奨励賞

新年ぬ夜明け 照り映ゆる白さ 新家んかい越して 一家団欒

病んかかて 梅雨空ぬ下 山羊小屋んかい今日ん 父や行きゆる

病進む中 一人行からんくなて 夫婦共に 小屋んかい行きゆん

床臥して八日 母ゆ傍らに 父母ぬ元んかい 父や行きやん

雨降ちやる天や 晴れ晴れとなたん 後生旅立ちやる 父ゆ迎え

宮城 真也

選評

小嶋 洋輔

小説部門 エッセイ部門 / 129

玉代勢 章

小説部門 / 136

あずさゆみ

小説部門 / 139

吉川 安一

短歌部門 / 142

おおしろ建

俳句部門 / 145

屋良健一郎

短歌部門 / 148

西原 裕美

詩部門 / 153

小番 達

エッセイ部門 / 156

波照間永吉

琉歌部門 / 158

照屋 理

琉歌部門 / 161



第一回名桜文学賞選考経過及び選評

【小説部門】

「沖繩」を書くということ

小嶋 洋輔

第一回名桜文学賞は、応募期間を二〇二〇年九月七日から十月九日までと設定、結果六編の小説作品が寄せられた。その小説作品を、選考委員三名で審査し、最優秀賞一編、奨励賞二編とした。選考の経過は以下の通りである。

- 選考委員…あずさゆみ（作家）、玉代勢章（小説家・文芸評論家）、小嶋洋輔（名桜大学教授）
- ・六編の小説を選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
 - ・十一月三〇日（月）に沖縄県市町村自治会館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編、奨励賞二編、とした。

十五回続いた名桜大学懸賞作品コンクールから名前を改め、第一回名桜文学賞ということで、気合いを入れて応募作を読んだ。選考委員の陣容を一新したこと、しかもコロナ禍ということで緊張もしていたと思う。同時に応募作が六編と例年に比して少なかったため、またダメかなという思いを抱きつつでもあった。ここ数年最優秀賞受賞作は出せていなかったからである。

結果から申し上げれば、最優秀賞も出すことができ、奨励賞も二編出せた。旭橋の自治会館を夕暮れのなか歩く足取りは軽かった。応募中半分の作品に賞を出したことになるが、問題は感じなかった。それだけこの三作は秀でていたと思う。県内のほかの賞に出したとしても、この三作は良いところまで行くだろう。

最優秀賞受賞作は神恵人の「水平線の内側」である。受賞者名を知ったとき、私は二重に驚いた。一つ断っておくと、本学の賞において我々選考委員は選考後まで応募者の個人情報は一切教えない。選考後に確認してもらった受賞者は昨年の奨励賞受賞者で、私にも近い学生だった。今年も出しているのかなとは思っていたが、前作のような作風（SF風）のものは見当たらなかったのである。これが一重目の驚きである。

さらにこの作品は、海洋博公園近郊で働くリゾートバイトの女性が主人公であり、その女性が一人称「私」で語る小説であった。いわば男性の作家が女性に擬して語る「女語り」の作品ということで、この主人公の女性とよく知る受賞者の顔を結びつけることができなかった。これが二重目の驚きとなった。女性の作家であれば、ここまで「私」で語る女性主人公とクールに距離をとれるかとは疑問には思ったのだが、書き慣れた作家なのかなとも思っていたので、驚いてしまったわ

けである。それだけ一人の女性がリアルに書いていると思う。「沖繩の文学」のなかで焦点化されることのなかった、短期で本土から移住してくる人間「シマナイチャー」の抱えた問題を浮び上がらせている。

そして無気力にリゾートバイトを続ける女性の内面を上手く書くには、その周りの風景をどれだけ書けるかということと直結するが、そこも素晴らしかった。作者がどのように取材したかは分からないが、海洋博公園周辺でアルバイトする学生も多い名桜生だからこそ書き得た素材ともいえ、その意味でも嬉しかった。名桜文学賞の第一回の最優秀賞作にふさわしい作品である。

ここでもほめ、私が担当している『琉球新報』の時評でもほめたので、ここからは少し不足に思っただころを述べたい。ひとつは結末である。一行空けて後日譚が書かれる結末なのだが、これには選考委員会でも賛否が分かれた。私は「否」であった。書き手が悩まず、主人公を放り投げたように思えたからだ。であれば、その前の波打ち際の場面で余韻を持たせて終わった方がよかったのではないか。もう一つは、うちなーんちゆが不在ということである。作中うちなーんちゆは登場するが風景とか比喩といったレベルでしかあらわれていない。そこが逆にリゾートバイトのリアルといえるのかもしれないが、その後景への引かせ方が作為的に過ぎるように思えた。最後に主人公の鏡像関係のようにあらわれる女子高生についてである。この存在は結末部にも関わってくるが、その中途半端なりアルさが読者に違和感を与える要因にもなっている。一人語りなのだから、もう少し主人公の空想に任せても良かったのかもしれない。女子高生ではなく、異性への甘えのような展開があればもっと深みが増したようにも思う。

奨励賞のうち瑞慶覧涼子の「馨」にも、私は丸を付けていた。この作家は昨年のエッセイ部門の最優秀賞受賞者であった。「ビジュル」に向かうふたりのかおるという名前の少年少女、風景描写も心中描写も優れていた。だが、同時に名詞の使い方に違和を感じた。たとえば、かおるという名前の漢字の使い分けに何か意味があるのか考えながら読んだのだが、読みとれなかった。地名を隠しアルファベットで表記する意図も伝わらなかった。さらには女性のかおるを「私」と書くような誤字もあり、最優秀賞に推せない要因となった。

最後に新垣未月の「淡い声」である。一読して作者が若いということは分かったが、丁寧な筆致で風景や思春期の登場人物の内面が描写されていた。だが、魅力的に思えた登場人物である冬子が未回収のまま終わる感じがして残念だった。登場人物一人一人の内面にダイブできるように、この作家は今後さらに伸びるはずである。

【エッセイ部門】

エッセイとは何か

小嶋 洋輔

第一回名桜文学賞は、応募期間を二〇二〇年九月七日から十月九日までと設定、結果六編のエッセイが寄せられた。その作品を、選考委員三名で審査し、最優秀賞一編、奨励賞二編とした。選考の経過は以下の通りである。

選考委員・吉川安一（名桜大学名誉教授、詩人）、小嶋洋輔（名桜大学教授）、小番達（名桜大学教授）
・六編のエッセイを選考委員各自で読み、首席、第二席（場合によっては第三席）を選出
・十二月七日（月）に名桜大学附属図書館会議室で、選考委員会を開催し、それぞれ講評を行った。そして審議の結果、最優秀賞一編、奨励賞二編、とした。

昨年の選評の繰り返しになる。エッセイに小説になり得る原型のようなモノが記述されることはあるかもしれないが、エッセイに何か足すと小説になるわけではない。そのことに今回も気づかされた。

これもまた、昨年の選評の繰り返しである。エッセイと評論や意見文とは異なる。評論や意見文は上記の選考委員が続くかぎりには選ばれないと思っただけだ。

今回応募作も少なく、昨年のようにあたま一つ抜けた作品はなかった。私としては最優秀賞作なしということも覚悟して選考委員会に臨んだ。

最優秀賞受賞作、大井倫子「マンガーの季節」はエッセイらしいエッセイだった。だからこそその感想なのだが、節立てが不要に感じた。この作品の思い出は節で区切る必要がない。また、叔父の死をエッセイ作品として仕立て、描くには消化し切れていないようにも感じた。こうした点が本作を最優秀賞には推せなかつた要因であるが、結構は整っており、作者の心情も素直に伝わってくる文体であることは事実であり、他選考委員の意見に強く反発する理由も見つけられなかつた。

おもしろさという点では、二藤の「私は蛹」の方を私は評価した。だが、冒頭の一文から見られる「クワガタの幼虫を育てることにしたんだ」「たんだ」「だんだ」という語尾の表現を良いと思えなかつた。体言止めも同様である。この文章が一般的な常体・敬体で書かれていたら、コロナ禍の「学生」の日常がもつとすんなり入ってきたのではないかと思うと、強く推すことができなかった。

もう一つの奨励賞受賞作、森山高史の「我が家のイノシシくん」もおもしろいエッセイであった。やんばるの風景が、端的に上手く切り取られている。ただ、日常を切り取るのが主たる目的になっていて、何をエッセイとして描きたかつたのかがよく分からなかつた。エッセイとして書きたい衝動に駆られた「ある日」のようなものが焦点化されていたら、違った結果だつたかもしれない。

最後の文も昨年の選評の繰り返しになる。令和の時代において、エッセイとは何か。選考委員である私も勉強し直したい。応募者もその点を少し考えてもらいたいと思う。

(こじま ようすけ／名桜大学国際学群教授)

【小説部門】

文学は感動である―三編の収穫

玉代勢 章

最優秀賞 「水平線の内側」（榊恵人。大学四年）

作者は内地のひとだと思ふ。沖繩に劣等感を抱かず媚びずに沖繩を冷静に見ていてさわやかだ。主人公は内地から本島北部のマリンレジャー施設に働きに来た若い女性である。社会からも労働からも疎外されている。沖繩人からもナイチャーと呼ばれて蔑まれている。

作者は社会の底辺で呻く若い労働者の哀しみと生きる疲労感を上手に掬い取っている、題名も素晴らしい。主人公が大学に行つてない学歴コンプレックスも巧みに織り込んである。沖繩人の氣質や言動や雰囲気をも鋭く洞察的に確に表現していて圧巻である。感動した。

二つ、短所がある。一。最終章の「半年後、女子高校生が：：水平線はもう見えない」までの文は削つたほうがいい。すでに暗示されていて心地よい余韻を奪つてしまうからである。二。沖繩の風景が淡すぎるし、荒い。時には濃く粘つくく描写すべきだ。この二つを克服していたら感動は極点に達したと思ふ。

奨励賞「馨」（瑞慶覧涼子。社会人）

自信がなく投げやりに生きていた少女が「ビジュルの神様」の導きで、しつかり前向きに生きようと決意する終章が美しく感動的に描かれている。また少女の性の目覚めをおずおずといじらしく表現していて胸を打つ。そして沖繩戦や基地の街を背景にした実在感と臨場感にあふれた、みずみずしく抒情的な筆致も秀逸である。主人公と作者の謙虚で純真な姿勢に私は泣いた。これが文学である。

ただ疑問が一つある。題名が「馨」になっているが内容とずれていると思う。「馨」ではなく「ビジュルの神様」がいい。また「馨」では主題が少女の恋になってしまつて狭くて浅くなる。主題を「人生に立ち向かう」イメージにすべきだ。「馨」の題名は良くない。

奨励賞「淡い声」（新垣未月。高校三年）

主人公の少女が事件の衝撃で失語症になる設定や図書館の本に暗号を書いた紙を挟むアイディアがいい。少女が困難に立ち向かつて行こうとする姿勢を見せる終章に感動した。

いくつか弱点がある。一。はじめを甘受する気持ちなど主人公の心理をもつと説得力が強いような工夫する必要がある。二。はじめに加わる冬子の動機や現在の心境（後悔しているのか、平気なのか）が分からない。三。主人公たちは中学生なのか高校生なのか判然としない。示すべきだ。四。主人公の名前「梓菜」はなんと読むのか。困惑をずっと引きずる。振り仮名をつけてほしい。梓菜でなければならぬ必然性も必要性も見当たらないが……。五。自分の作品は高校生だけでなく大学生も社会人も中年のひとも高齢者も読むことを強く意識して構成し表現してほ

しい。

「シルクロード」(社会人)

現代の社会生活に適応できない高齢者を描いていて興味深かった。ただ小説としての味わいを出すためには、話を一つか二つの出来事に絞って、そして困惑や悲しみの底に静かに深く下りて行って過ぎ去った人生や直面している老いを丁寧に詳しく描くと思う。

「紅く染まる」(大学二年)

何が出て来るのか、何が起きるのか、読者へ誘惑の光を放っている。だが鍵を握る「紅い人」や「赤い空間」が終始一貫、抽象的で漠然としていてイメージが湧かない。人間関係と事件を具体的に構築・展開して読者に分かるよう提示してサービスする必要がある。

「喜如嘉の夕日」(社会人)

小説の形ができています。また描かれている人びとの人生が切なくて好感が持てる。ただ、たくさんさんの人の人生が描かれているので感動が拡散し薄められている。妻との生活と関係に絞って濃く深く粘り強く述べるといい。

(たまよせ あきら／小説家・文芸評論家)

【小説部門】

収穫と学び

あずさ ゆみ

このたび、第一回名桜文学賞の審査員をさせていただくことになった。かつて「審査される」側にいた私が「審査する」側になり、光栄であると同時に、私のようなペーペーにできるだろうか？ との不安もある。襟をただしながら、選評に臨みたい。

最初に、最優秀賞を受賞した『水平線の内側』について述べる。本作を私が推した一番のポイントは、主題が明瞭で一貫しているところである。「神は細部に宿る」という言葉がある。『ディテールこそが作品を決定するという意味で使われるが、ディテールに凝りすぎて中心を失い枝葉末節、何が書きたいのかわからない作品もある。その点、本作は非常にシンプルな構造が取られ、成功している。最初に読んだとき、正直素っ気なさすぎるとも感じた。文体も非常に簡潔だ。しかし、作品の主旨と合っているため欠点ではなく美点だと考えた。

また、沖繩に対して幻滅を覚えるナイチャーを主人公とした設定が良かった。沖繩を「癒しの島」として書いたものはあれど、ナイチャーの目から否定的に書かれたものは少ない。現実にも、沖繩に憧れて移住しながらも、低賃金と将来への不安で内地へと帰っていった人は多くいる。「海

はきれいだけど食べない」のだ。作品の冒頭で沖縄のシンボルとなる美しい海が出てくるのも象徴的である。

このような題材に挑戦した作者にエールを送りたい。タイトルも内容にぴったりである。

次に奨励賞を受賞した『馨』を取り上げる。冒頭から、情景描写が抜きんでいていけると感じた。個人的に、風景や音や匂いを描いた文章が好きなきともあり、心地よく読んだ。ちよつとした日常の描写も、記憶の引き出しにしまっていた大事なもののように、柔らかさと慈しみが感じられる。作者はエッセイも向いているのではないか。

物語はビジュル神と薫との交感がメインとなる。ビジュル神に会いに行こうとする薫の行程に馨という少年がかかわってくるのだが、残念ながら私には馨の存在が物語に必然だとは思えなかった。不思議な力を持つ薫とビジュル神との対話を、馨がいつたいていどう見ているのか。そのリアルラインもはつきりせず、ラストシーンの薫の感動に共鳴できなかった。

最後に『淡い声』について。本作品は心理描写のいいえさ、繊細さが良かった。本に仕込まれた暗号というトリッキーな手段を使っているところにも引かれた。ただ、その後の展開がやや単調で、もう一つか二つの仕掛けがあると読者の興味を持続させるだろう。また、冬子との関係も梓菜の推測と希望だけで終わり、すつきりしない。梓菜は声が出なくなっても、明日乃と本の暗号で交流ができた。冬子にはピアノがある。これを効果的に使えたのではないか。梓菜の中だけで完結する関係性から、一步踏み出してほしかった。

奨励賞の二作品は、言葉をていねいに紡いでいるところに特に好感が持てた。書くことへの深

い信頼が感じられた。

最優秀賞、奨励賞を受賞した三名は、まだまだ伸びしろが感じられる。今後が楽しみだ。私自身もこのたびの選評で多くの学びを得たように思う。応募された方々に感謝したい。

(あずさ ゆみ／作家)

【詩部門 短歌部門 エッセイ部門】

第1回名桜文学賞の選評

吉川 安一

筆者は、高等教育機関の大学で学ぶ学生や地域社会の人々の豊かな表現力を培う土壌づくりと表現活動の成果に寄与する第1回名桜文学賞の審査と選評の機会に恵まれた。

名桜文学賞の応募作品は、審査を通して内容的に質の高まりを感じた。名桜文学賞が今後、回を重ねるごとに文学界から高く評価されることを念じている。

筆者は、応募作品の詩・短歌・エッセイの3部門の審査を担当した。3部門とも4人の審査員が対応した。詩・短歌・エッセイのどの作品部門とも上位の審査結果は、4人の審査員が共通作品を推挙していた。筆者は、後期高齢者の身であることを承知の上で審査に臨んだが、結果的には他の審査員と共に、審査結果を出せたので安堵したが審査力の低下を感じている。

応募作品の中には、審査の結果で受賞作品に選ばれなかった作品もあったが、どの作品とも表現者の思想心情や社会的事象等が表現されていることを知り、表現者の文学作品への創作意欲と表現力を感じた。今後の創作活動を期待したい。更には、読後、作品の中には作者と共に創作の背景や生活舞台を訪ねてみたいと思いを膨らませる作品もあった。

4人の審査委員の話し合いで筆者が、短歌部門の選評を担当することになった。筆者は、短歌部門を審査するにあたり、形式・言語・内容・主題の4の観点を設定した。形式では、短詩型文学の短歌は、57577の音数律で作品が構成され成立している。その基本が厳守されているかどうか。言語では、内容が適切な言語で表現され文字言語の誤記がないか。内容では、社会事象・人事・自然現象・社会観・人生観等が作品の中に如実に取り入れられているか。主題では、作品の中心となる思想心情が理解者、読み手に伝わる作品であるか等を読み深めた。

作品の選評でも、上述の4の観点を加味した。短歌部門の募集作品は、一人5首規定で、21人の応募者がいて105首の作品を審査対象にした。5首の作品を一括して題名が付けられている。今回は、21人の作品審査で、最優秀賞の受賞者該当なしの結果になった。奨励賞では5人が選ばれた。受賞者の作品には、「ひとりでも姦しい」・「翼をください」・「yellow」・「夕焼け空」・「花火よ日々よ」等の題名が記されていた。

応募作品の中には、私的生涯や若者の人生観の心象風景を描いた作品。自分自身を科学的に捉えた作品。人生を哲学的に表現しようとする作品。障害者と家族愛が満ち溢れる作品。後期高齢者の生涯学習の一環として短歌創作に挑む作品。その他、作者の生き方等を追求した作品等があった。言語表記では、誤記等は少なかった。

今回の作品審査では、特に形式の57577の音数律を厳守しなかった作品が目立った。

応募者の年齢層や地域社会や短歌創作活動の積年数等を知ることができれば、新たな短歌の創作活動への支援協力と共に「名桜文学賞」への応募者の底辺を広げることも出来るのではない

かと密かに考えた。

沖縄県でも、短歌の創作活動が組織的に活発に行われている。特に生涯学習の一環として後期高齢者が中心に短歌等の創作活動を推進しておられる。名城大学でも創作活動の資質向上のために短歌等の研修会等が望まれる。

今後、名城文学賞の推進・拡大で沖縄の短歌活動や他の文学活動の人口が増えることを希望する。

(よしかわ やすいち／名城大学名誉教授)

【詩部門 短歌部門 俳句部門】

俳句部門選評

おおしろ 建

俳句の募集は昨年の「第15回名桜大学懸賞作品コンクール」が初めてであったためか、わずかに四作品だけの応募という寂しいものであった。今回の「第1回名桜文学賞」は二四作品もの応募があり、俳句部門の認知が広がったようであらう。俳句部門は五句で一作品の募集で、五句をひとまとめとしたタイトルをつけることになっている。選考は作品の五句があるレベル以上で揃っているか。新しい発想の俳句があるか。また、一作品としての広がりがあるか、などが問われた。氏名は伏せての審査会であった。

最優秀賞「古い嘘」(森山 高史・もりやま たかし)は手慣れた感じの作品だ。

〈宵寒や古い日記の古い嘘〉。「古い日記の古い嘘」のフレーズに惹かれた。寒い夜であろうか。古い日記を取り出して眺める。そこには若い頃の古い嘘が書かれている。思わず独り赤面し、寒さがぐっと増す。〈爽やかや大言壮語のなかゆくい〉。「なかゆくい」の方言の使い方が楽しい。秋の清々しい季節の中で、「大言壮語」を吐きながら「ひと休み」しているようですがユーモラスで、

くすりと笑ってしまう。(肅肅と書類を捨てる夜半の月)。辺野古の新基地建設に関して「肅肅と工事進める」などとよく発言された「肅肅」の言葉を逆手に取って、皮肉を込めての一句であろう。(老犬が妙に甘える今日の月)(機を織る君の気たるさ冬隣)の二句も味わいがあったてよい。

奨励賞「生きてゐる」(輝 龍明・てる りゅつめい)は最優秀賞を争った作品だ。

〈コンクリに冬瓜ごろり生きてゐる〉。無機質なコンクリに「ごろり」転がる「冬瓜」。コンクリと冬瓜の対比がよい。冬瓜の存在の重さや生命力の強さを感じさせる。(星生まれ星に死のあり花福木)。空には無数の星が輝く。目を落とすと地上の星のように福木の花が散っている。その花に星の死骸を感じたのだろうか。(蟋蟀の声に磨かれゆく夜かな)。「声に磨かれゆく夜」の表現がよい。磨かれた夜が透き通っていくようだ。(初秋や生き方見直す屋籠^{ヤクゴ}り)。外出自粛のコロナ禍の今を詠んだ句。生き方は変わったのだろうか。(靡かざるもののひとつに椰子の花)。靡かない椰子の花のように私とも思うのか。

奨励賞「花虻よ」(本村 隆信・もとむら たかのぶ)は安定感があった。

〈花虻よ花の命を知ってるか〉。花から花へと気ままに蜜を吸っていく花虻に問いかける。「花の命を知っているか」と。やがて散るであろう花にも生があるのを意識した句か。(初明りして呱呱の声老いの声)。めでたい元日の夜明けの光りの中で乳呑み児が泣いている。その声に「老いの声」を感じているという。人の一生というものをしみじみと感じているのだろうか。(恐々

と二百十日の甘蔗きびの村」。二百十日は台風襲来の時期である。

奨励賞「他人行儀な風」（金城 理子・きんじょう りこ）は感性が光る作品だ。

〈爽やかに葉に残る朝、揺れる木々〉。「葉に残る朝」があるとの発想がよい。〈秋高し 木々のすき間にある水晶〉。秋の空が高く澄み切っているからこそ、木々の間に射し込む光が「水晶」のように感じたのか。〈夕暮れのすました顔の秋の風〉。風に「すました顔」を感じたのがよい。〈秋のまち 王冠被った風が吹く〉。「王冠被った風」ってどんな風なのだろう。分ち書きや読点を用いているが、必然性をあまり感じなかった。

（おおしろ けん／俳人）

【詩部門 短歌部門 俳句部門】

短歌部門の評

屋良 健一郎

昨年度で第十五回の節目を迎えた「名桜大学懸賞作品コンクール」が「名桜文学賞」に生まれ変わった。昨年度と同じく六つの部門で作品が募集された。

詩・短歌・俳句の三部門の審査は令和二年（二〇二〇）十一月二十八日に沖縄産業支援センターの会議室で行った。俳句部門の審査員はおおしる建氏、西原裕美氏、屋良の三名で、詩部門と短歌部門の審査員はこれに吉川安一氏を加えた四名。こういった賞では、詩部門であれば詩人のみの、俳句部門は俳人のみの、短歌部門は歌人のみの審査員構成となることが一般的だが、様々なジャンルで審査員が構成されているのがこの文学賞の特徴だ。そうすることにはデメリットも当然あるだろうが、ジャンルを越えた審査員で意見を交わすことで、様々な「詩」を見出すことができるのではないかと期待もある。

応募数は、詩部門十五編、短歌部門二十一編、俳句部門二十四編。審査員はこれら作品にあらじめ目を通して、自分が良いと思った作品を三編程度選び、当日の審査に臨んだ。それぞれの部門の入選作品については他の審査員が評しているので、ここでは、私が専門とする短歌に限つ

て述べたい。

短歌部門は「ひとりでも姦しい」が高い評価を得た。期待される「女性らしさ」と現実とのギャップが自然な口語で詠まれる。

お姫様なれると信じ生きてきたこの心こそチャームポイント

おしゃべりくそ女なので三十一文字ぼつちにまとめるの無理

「かわいい」に囲まれ生きていくんだと積まれた耐ハイ横目に嘯く

おしながき仕事仕事仕事枯れる休日ねえ休めてる？

自らを「おしゃべりくそ女」と言い切ってしまうユーモア。「かわいい」ものを愛し、周囲からも「かわいい」と言われる生き方を目指すのだと嘯く。しかし、実際には耐ハイの空き缶がどんどん積み上がっていくほどの酒好きで、「かわいい」からはほど遠い。「ひとりでも姦しい」は作中主体（歌の中の主人公）の女性のキャラクターがいきいきと伝わってくるのが魅力だろう。ただ、「お姫様」の歌、「おしゃべりくそ女」の歌は面白い歌ではあるが、すべてを言い切つていて説明的であるために、読後に印象に残るかという点、厳しい。口語が悪いわけではないが、口語の軽さで、分かりやすい歌、ストレートな歌を詠んでしまうと、読み手の中をさらっと流れてしまい、ひっかかるものが案外無いのではないか。五首での応募の賞で、こういった歌が二首あると、作品全体がかなり緩んでしまうようだ。もう少し緊張感というか、読者に読ませる歌、考

えさせる歌があつてもいいように思う。

なお、「ひとりでも姦しい」をめぐつては、五七五七七の短歌の定型に照らしていかげなものかという意見もあつた。「おしゃべりくそ女」の歌、「おしながき」の歌は一見すると三十一音になつていないように思えるが、「おしゃべりく／そおんななので／さんじゅうい／ちもじぼつちに／まとめるのむり」「おしながき／しごとしごとし／ごとしごと／かれるきゅうじつ／ねえやすめてる」と区切りがイレギュラーなものの、三十一音になっている。これは「句跨り」という手法である。こうしてリズムを崩すことで、「おしながき」の歌では仕事が押し寄せてくるような切迫感が出ていて、ある程度成功しているように思う。だが、「おしゃべりくそ女」のほうはかえつてマイナスに働いたのではないか。「おしゃべり」を印象づけるなら、むしろリズムを良くしたほうがいいのではないか。

「ひとりでも姦しい」は高い評価を受けつつも、五首ひとまとまりとしてみた時の完成度（完成度の低い歌の混在）と、リズムの崩し方で意見が分かれて、今回は最優秀賞はなしという結果になった。

「翼をください」も好評価を得た作品であつた。

借りてから一度も読んでない本を返すみたいなの法事の旅行

借りたのに結局読まないまま返す本。なんだか少し寂しき、欠落感のようなものがあるのだが、

しかしそんなに深刻というわけではない。おそらくこの「法事」はそんなに身近な人のものではないのだろう。長らく付き合いのなかつた親戚を想像した。

とめどなく流れる時に埋もれ逝くぼくが化石になる朝の月

時の流れのなかで化石になるという捉え方が詩的だ。「化石になる」で終わるのではなく「朝の月」と視点を風景に向けて一首を終えた点が良い。そのことで、一人の人間の人生よりもはるか大きな存在としての自然が印象づけられ、「化石になる」ほどの悠久の時間が想像される。

「翼をください」は右の二首のような独特な比喻が印象深かつたのだが、〈食物の連鎖 生体ピラミッド 理科の授業で学ぶニンゲン〉はそのまま過ぎ（説明的過ぎ）て、弱かつた。

「yellow」も印象に残る作品ではあつたが、五首目の「奥へ進むめど」が気になつた。「奥へ進むめど」の誤記だろうか。「夕焼け空」は一首一首がしっかりした文体で詠まれていて安定感があるが、時系列に沿つてうまく五首をまとめた感じがして、そのまとめかたがかえつて説明的な印象を与える。

「花火よ、日々よ」は「妻に（子に）」のカッコの使い方が歌に物語性を持たせ、「病棟は雨の匂いの届かない国」も病院の非日常感を伝える比喻で良い。ただ、「お荷物」という表現が気になつた（必然性が感じられなかつた）のと、「苦しみ」「つよい」「日々という奇跡」など、主観的・観念的な語が歌をやや大雑把にしてみましたようにも思えた。

五首での応募というのは難しい。もう少し歌の数が多ければ、傷がある歌が一首や二首あってもあまり気にならないだろう。五首という少ない数での応募だからこそ、力作を五首出してほしい、と審査員としての欲が出てしまう。やや厳しめの評になってしまったかもしれないが、短歌部門が最優秀賞なしの一方、奨励賞を五作品と多めに選出できたのは、優れた作品、今後が期待される作品が多かったためである。特に今回は若々しい文体、表現の作品が存在感を放っていたように思う。来年度はどのような作品が出てくるのか、今から楽しみだ。

(やら けんいちろう／名桜大学国際学群上級准教授)

【詩部門 短歌部門 俳句部門】

名桜文学賞詩部門選評

西原 裕美

今回、いくつかの部門の選考に関わらせて頂いたが、私からは、詩部門に絞って選評を書かせて頂く。

十五篇の応募があった。選考を行う際には、名前や年齢は伏せて行われる。名桜文学賞は、特に年齢制限を設けていないが、読んだ感覚としては若い世代からの応募が多かったのではないだろうかと思う。全体的に、自分自身と向き合うような作品や、自分自身の中で生まれる葛藤を描いているような作品が多かった。

最優秀賞『違ったもの』（秋雨一也）について

作品として、一貫性やまとまりがあった。自分自身に向き合ってみると、一般的な感覚との乖離が生じてしまっていることを描いているよう。とげとげしい表現の中から突如出てくる「レモンバーム」の単語は目を引いて、良いアクセントになっていると思う。一つ一つの言葉が丁寧に綴られている印象を受けた。漢字やカタカナの使い方も美しく、読者に対する気遣いが感じられる。

奨励賞『心の海色』（綾村湯葉）について

心惹かれるタイトルである。「海色」とはどんな色だろうと読者を誘う。少なくとも、この作品にとつての海色は、単純に楽しくて美しいだけのものでは無い。「くじらになりたい」という流れも良いと思う。最後の「身勝手に助けてほしい」という締めくくり方も切実さが感じられて素敵である。

奨励賞『一九九九』（葬ヤマメ）について

時々使われている体言止めが良いリズムを生み出している。現代社会に生まれ落ちたことに対する様々な思いが伝わってくる。選考会では、行間をあけたほうが良いのではないかという意見もあった。しかし、私個人の意見としては、この詩は行間を詰めて書かれていることで、読み終えた後の走り抜けた感じが生まれており、良かったのではないかと思う。

奨励賞『ぼうやのせかい』（あやひよつや）

平仮名だけで詩の世界を表現するのは非常に難しい。それを上手にやり遂げている。優しい言葉と、繊細な表現で「ぼうや」の世界を描き出している。とてもいい作品だと思ったものの、最後に説明しすぎてしまっていて、惜しいという印象を持った。そこがなければ、最優秀賞に推したかった。とはいえ、非常に底力を感じる作品だった。

奨励賞『悲しき炎』（青木仁奈）について

読んでいて、力強さを感じる。内側から沸き立つように書いたのだろうと想像する。三連目が魅力的で、大人が与える恩恵の雨が、若者にとっては、炎を消してしまう散弾であるという発想は面白い。

今回入選した作品以外にも、応募のあった作品はどれも詩を書く動機を感じさせるものだった。表現したい意欲を持っているからこそ、それが小説や随筆、俳句や短歌などではなく、「どうして詩なのか」ということを考えてみても良いかもしれない。詩だからこそ伝えられるもの、詩でしか伝えられないもの、詩だから広がる表現の幅があると思う。

また、今回応募のあった作品について、どれも自分らしい言葉で書いているということが魅力的だった。誰かの真似をするのではなく、読者に媚びるのでもなく、等身大の自分から生まれる言葉を使っている印象がある。これからも頑なになりすぎず、柔軟でありながらも、自分自身の言葉を見失わずに描き続けて欲しい。

（にしはら ゆみ／詩人）

【エッセイ部門】

第一回名桜大学文学賞

小番 達

はじめに最優秀賞を受賞した「マンゴーの季節」について。この作品では、高校から大学進学、そして大学での留学という時間の推移と、奄美、沖縄、台湾という異なった場所での生活について、マンゴーにまつわる話題―その時々、それぞれの場所で味わうマンゴーの味が異なる―が綴られている。「今年のマンゴーはあんまり甘くないね。」の一文から書き出され、これに呼応するかたちで「今年のマンゴーはすごく甘いね。」の一文で閉じられる点もよく練られていると感じられた。文章の拙さは否めないところがあったものの、様々な経験を経て筆者自身が成長していることをマンゴーの味わいを通して語っているところが秀逸だった。また、台湾の歴史を絡ませた記述も効果的だった。最後に置かれた「叔父」の死をめぐるエピソードは読み手を惹き付けるものがあったが、前半部で「叔父」に関わる話題をもう少し書き込んでおいてもよかつたと思う。

続いて奨励賞の受賞した二作品について。まず、「私は蛹」は、このコロナ禍における大学生の心の裡を描いた作品である。日常生活、学業に制限がかけられた中での不安や戸惑いを感じながらも、飼育するクワガタが幼虫から蛹となり、ゆつくりと、しかし着実に成虫となる準備をし

ている過程に、未来へ向かって羽ばたくであろう自身を重ねる。閉塞感のあるコロナ禍という状況を前向きに捉えようとする点が評価できた。また短いセンテンスをつなぐ文章も比較的読みやすかった。だが、「くいたんだ」「くするんだ」といった語りかけるような表現がところどころにみえるが、その効果、意図が伝わってこなかった。また、書き出しにもう少し工夫がほしかった。次に「我が家のイノシシくん」は、自宅にやってくる猪をめぐるエピソードを綴った作品である。猪の行動や「ケモノミチ」の形状など細かな観察に基づく描写、そして時にユーモアを交えながらも猪の対する愛情のようなものを感じさせる内容が評価できた。しかし、冒頭の「よく」、「近く」の言葉の説明は、その後の内容からすると冗漫さを感じられ、「ケモノミチ」と「獣道」の書き分けの狙いが不明瞭で、表記へのこだわりがかえって読み手の集中力を殺ぐように思った。また、上に猪に対する愛情のようなものと述べたが、最後の書き方ではそれが感じられない。もっと猪に対する思い入れのようなものを書き込んでよかったように思う。

最優秀賞者はもちろん、奨励賞者、また惜しくも選外となった応募者にも今後の執筆に大きな期待を寄せている。これからも多くの文章を読み、多くの文章を書いていただきたい。それが文章力を向上させるはずである。そして、前回の選評でも指摘したことだが、「観察眼」も是非磨いていただきたい。日々の生活の中で誰もが見逃してしまうような出来事、事物に注目し、そこから自身の思いや考えを展開、派生、深化させてゆくことがエッセイに求められるものの一つと考えるからである。

(こつがい とおる／名桜大学国際学群教授)

【琉歌部門】

第1回 名桜文学賞 琉歌部門講評

波照間 永吉

今年度の琉歌部門の応募者は7人、作品数は21首であった。全てが、いわゆる琉歌の短歌形式であった。大学が一般に向けて公募する文芸作品コンクールの応募作品数としては寂しい数である。その原因は、宣伝が行き届いていないところにあると思うが、一般の方々の琉歌というジャンルに対する関心の低さも考えるべきであろうか。それは琉球文学が人々の興味ある領域となっていないということであり、広く考えると、沖縄のアイデンティティーの奥深いところにも関わって、決して看過すべき事ではないように思う。そのような少々重い気持ちになりながら選考作業を行った。しかし、結果は優れた作品の幾つかに巡り会い、救われる思いであった。大賞のたいらはやとさんの作品はいずれも端正で、質の高さを保ち、作者が並々ならぬ実力を持っておられることを示していた。中でも最優秀賞の作品は、夜の暗闇の中をシマを目指して走ってくる船に、津口・湊のありかを示すために火を焚いて船を迎えた村の人々の息吹を伝えて、優れている。昔の航海では夜は難破の危険が倍加する。船の帰りを待つ人々は安全を祈って火を焚いて船を津口に導く印とした。近世期の大和では、風波が激しく荒れた夜に偽りの火を焚

いて岩礁に船をおびき寄せわざと難破させ、その積み荷を略奪する海賊的行為をなす村があるほどであった。夜の湊のあたりはことほど左様に船の運命を左右するものであった。その航海に関わる村の民俗を見事に掬い上げた一首として感銘深いものがある。同じ作者の「ウドウイガマしぬでい」の歌も良かった。上句の「ウドウイガマしぬでい 暫し腕組みば」の、「暫し腕組みば」が、昔を偲ぶ作者の姿を彷彿とさせて効いている。何でもないことのようにであるが、私にはそれが面白かった。

奨励賞として謝花健松さんの作品から2首選んだが、この方も琉歌を詠み慣れている人のように思われた。音数律からはずれたのが一首あったが、これはもしかしたら、単なる脱字かもしれない。内容的には優れていただけにもつたいないことであった。しかし、選歌した「なゆるむぬやりば 恩納ナビー行逢てい 恋ぬ情花 咲かち見欲き」はユニークな発想で楽しい。普通なら「会つてみたい」「一緒に歌つてみたい」とかになりそうところを、「恋ぬ情花 咲かち見欲き」と、情熱の人・恩納ナベと恋の語らいを試みたい、というところが意表をついて面白い。それから、「今帰仁ぬ城址」の歌も「桜花柔く」の「柔く」が作者の眼の細やかさを伝えているし、「色清らく笑てい」の「笑てい」も、花の咲くことを「笑う」という比喩的表現の知識を活かして表現を豊かにしている。

もう一つ奨励賞として宮城真也さんの作品を一首選んだ。亡くなった父を偲ぶ作品で、晩年の日常の日々から、病床に伏し、ついには死を迎えた父の姿を思い描く連作である。テーマは重いのだが、一首一首のモチーフは、その父の日々の姿をつぶさにみてきた作者の温かい眼差しによつ

て選び取られたもので、作者の父親に対する愛情が伝わってくる。ただ残念なのは、字足らず、字余りや、琉球語（琉歌語）の文法にそぐわない表現が散見されて、歌としての完成度をそこなうてしまっている。今後、そのあたりのことに気をつかってもらい、琉歌としての表現を磨いていただければ、すばらしい作品を生み出すことができるだろう。

残念ながら賞に漏れた方々には、来年を期していただきたい。古典を始め、多くの琉歌作品にふれると同時に、日々の生活の中で琉歌を作ることに慣れ親しんでいくことが、すばらしい琉歌を生む道だろう。ともに勇んで琉歌を詠んでいきたいと思う。

（はてるま えいきち／名桜大学博士課程研究科長）

【琉歌部門】

名桜大学2020琉歌コンクール 選評

照屋 理

今年度、2度目の琉歌コンクール募集の運びとなった。初回の昨年度を上回る琉歌の応募があった。僅かずつではあるが、次第に知名度が上がってきているということであろうか。今後、更なる応募が期待される。

最優秀の作品は、「夜闇来る船^{ユキミ}」と題された作品群の中の1首が選ばれた。舞台は闇に包まれた浜辺、そこに舟の帰りを待つ人がいる。その手に握られた松明の火は、船頭へ津口の場所を知らせるためのものである。沖繩の島々は珊瑚礁に囲まれた海岸が多く、その切れ目である津口から出入りしなければ舟は座礁してしまう。船頭へ津口の場所を知らせ導こうとするのは、仲間であらうか、妻あるいは姉妹であらうか。墨を流したような洋上から見る浜辺の炎は、小さくとも頼もしく輝いていたことであろう。本作品は、かつて琉球列島のそこ彼処でみられた海岸風景を照らし出す。

同作者の作品には他に、ムラ行事の舞踊などを他集落に見えないよう練習した洞穴（ガマ）を詠みこんだ、「ウドウイガマしぬでい 暫し腕組み^{ウデ}ば んかし世^ユの遊び 耳に響^{ヒビ}ち」など、琉球・

沖縄の民俗文化がふんだんに盛り込まれ、非常に興味深く引き込まれた。

「なゆるむぬやりば」は、発想の面白さを感じさせられる一首であった。恩納ナビーといえば言わずと知れた、吉屋チルーと並び称される2大女流歌人である。伝説的な部分の多い恩納ナビーは、評者にとつてセピア色の世界の住人であるが、そのナビーとの逢瀬を夢見る点がユニークである。多くの琉歌を鑑賞しつつ恩納ナビーの歌を味わい尽くす経験がなければ生まれぬ発想であろう。作者が琉歌の世界と令和の今を行き来し楽しんでいることがうかがえる。また、同作者は5首の作品を応募しているが、「今帰仁の城址 桜花柔く 色清らく笑てい 咲ちゆる嬉さ」という作品など、全体に方言を自在に操る感性がうかがわれ、注目された。

「床臥して八日」は、同作者による5首連作の琉歌作品群からの1首である。「新年ぬ夜明け 照り映ゆる白さ 新家んかい越して 一家団欒」という清々しい歌から始まる作品群は、2首目、3首目に父親の「病」が詠み込まれ暗転してゆく。今回の受賞作はその4首目である。作者にとつて非常に短い時間の中の辛い別れであったことが、「床臥して八日」という歌詞に、まず込められている。初句に続く、家族に見守られながら祖父母のもとへ行くという歌詞からは、永の旅に立つ父親を暖かく包もうとする心情が、琉歌の持つ穏やかなリズムを通してこちらへ伝わってくる。

以上を、上位3首についての評言とする。

なお今回、若手によるとみられる応募作品が複数みられた。コロナ禍や首里城火災など最近の話題を詠みこんだ意欲的な作品があったが、残念ながら選に漏れた。琉歌の表現や方言の言い回

しは、講義を通して学習する以外に、先人の作品に接するだけでも学べる。歌人や女流歌人と呼ばれる人々の作品により多く触れてほしい。今後に大いに期待したい。

(てるや まこと／名桜大学国際学群上級准教授)

名桜文学賞

第二回(令和二年度)



平成6年の開学以来、名桜大学は「平和」「自由」「進歩」の建学の理念の下、
地域に関わり、地域とともに発展する大学をめざし、努めてまいりました。
昨年度「名桜大学懸賞作品コンクール」が15周年の節目を迎え、
今年度より「名桜文学賞」として新たなスタートを切ることとなりました。

作品募集

募集期間

令和2年9月7日(月)～10月9日(金)【必着】

募集部門

小説/詩/短歌/エッセイ/俳句/琉歌 全6部門

詳細は裏面をご覧ください。

作品送付先および問い合わせ先

名桜大学附属図書館 名桜文学賞作品係

〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 電話:0980-51-1062

名桜大学HP:<http://www.meio-u.ac.jp/>



公立大学法人

名桜大学
MEIO UNIVERSITY

第1回(令和2年度) 名桜文学賞

賞および賞金

- ①小説部門 最優秀賞(賞金10万円)1名
- ②詩部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ③短歌部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ④エッセイ部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ⑤俳句部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ⑥琉歌部門 最優秀賞(賞金3万円)1名
- ⑦上記6部門 奨励賞(記念品)若干名

※高校生は賞金相当額の図書カードとします。

応募資格

- ①沖縄県内在学者(高校・高専・短大・大学・専門学校)
- ②沖縄県内在住社会人

応募条件

- ①応募作品は未発表の作品
(新聞・雑誌・同人誌やホームページ・ブログ・SNSなどで発表していない作品)に限ります。
- ②同時に3つ以上の部門への応募はできません。

応募要領

①「小説部門」

- 400字詰原稿用紙で30～50枚程度(原稿用紙使用の場合は必ずA4サイズを使用すること)。ワープロ原稿は、1行30字×40行を目安にA4判のマス目のない紙に印刷する。応募は1人1作品とする。
- 表紙に部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)、および400字詰換算枚数を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず通し番号(ページ数)を入れて、右肩を綴じる。

③「短歌部門」

- 短歌は5句での応募とし、400字詰原稿用紙1枚に5句を記す(縦書き)。ワープロ原稿は、字数・行数の設定は自由とするが、1枚に5句を記入すること。応募は1人1組(5句)とする。
- 表紙に部門名、5句をひとまとめとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

⑤「俳句部門」

- 俳句は5句での応募とし、400字詰原稿用紙1枚に5句を記す(縦書き)。ワープロ原稿は、字数・行数の設定は自由とするが、1枚に5句を記入すること。応募は1人1組(5句)とする。
- 表紙に部門名、5句をひとまとめとしたタイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

②「詩部門」

- 400字詰原稿用紙で3枚以内(縦書き)。ワープロ原稿は、1行20字×20行のマス目を表示したA4判の紙に印刷する。応募は1人1編とする。
- 表紙に部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず通し番号(ページ数)を入れて、右肩を綴じる。

④「エッセイ部門」

- 400字詰原稿用紙で5～10枚程度(原稿用紙使用の場合は必ずA4サイズを使用すること)。ワープロ原稿は、1行30字×40行を目安にA4判のマス目のない紙に印刷する。応募は1人1作品とする。
- 表紙に部門名、タイトル、氏名または筆名(ふりがな)、および400字詰換算枚数を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。
- 原稿には必ず通し番号(ページ数)を入れて、右肩を綴じる。

⑥「琉歌部門」

- 琉歌は5句以内(1句から5句)での応募とし、400字詰原稿用紙1枚に記す(縦書き)。ワープロ原稿は、字数・行数の設定は自由とするが、1枚に記入すること。応募は1人1組(5句以内)とする。
- 形式は8・8・8・6音の琉歌を基本とする。仲風や長歌(8音句が5句まで)も受け付ける。
- 言葉は沖縄地域の方言を基本とするが、それ以外の琉球諸語の使用も可。
- 漢字表記には琉歌としてのヨミ(発音)をルビ(ふりがな)で示す。
- 表紙に部門名、氏名または筆名(ふりがな)を明記する。
- 原稿の末尾にページを変えて、住所、電話番号、氏名(本名・ふりがな)、年齢、職業(学校名・学年)を付記する。

表彰式

令和2年12月13日(日)予定

- 注 記
- ※選考経過についての問い合わせは、一切応じません。
 - ※応募に関する個人情報は賞の発表・連絡以外には使用しません。
 - ※応募後、作品の修正や変更はできません。
 - ※原稿はれいかなる場合にも返却しません。
 - ※受賞作品に関しては、図書館の預行物に限り(図書館HPへの掲載を含む)、受賞者からの掲載の許諾確認を経ずに公開することができることをします。

応募要領



公立大学法人

名桜大学
MEIO UNIVERSITY

編集後記

これまで「名桜大学懸賞作品コンクール」として15年継続してきた文化事業の名称については、「名桜文学賞」として令和2年の本年度に新たにスタートを切ることになりました。しかしながら、本年度においては通年においてコロナ禍が収まらず、例年学内において実施していた各部門の受賞者、並びに関係各位にご参加いただき実施していた受賞式については、諸般の事情に鑑み開催中止を余儀なくされました。事務局としてこの判断は致し方ないものと受け止めていますが、コロナ禍の折にもかかわらず応募いただいた皆様と選考委員の関係各位に感謝申し上げます。

受賞者の皆様におかれましては、作品集に掲載される作品と選評を糧に今後とも創作活動に精励されますよう祈念しております。

第一回名桜文学賞受賞作品集

(名桜大学附属図書館報 特別号 令和二年度)

発行日

二〇二二年三月三十一日

編集・発行

公立大学法人名桜大学附属図書館

〒九〇五-1858

沖縄県名護市字為又二二〇-1

印

刷

株式会社 国際印刷

名桜大学附属図書館報 特別号 令和2年度

